

5.3、創価学会の日に思う―「教学要綱」への疑問

2025年5月3日

「釈尊は永遠の仏」「日蓮は地涌の菩薩」とする「御義口伝 要文講義」及び、曼荼羅本尊の相貌「有供養者福過十号」「若脳乱者頭破七分」は不要、日蓮は誤っていると論述した宮田幸一氏が「自ら完成に一助出来た」とする「教学要綱」に対して、池田先生の監修と明記したことへの疑問（本稿 5 頁に詳述）

創価高校・大学4期 岡斉修



本日、創価学会の日を慶祝申し上げ、三代会長、牧口常三郎先生、戸田城聖先生、池田大作先生へ、衷心より報恩感謝、追善回向申し上げます。

私は、先月 4 月 2 日に、戸田先生のご生誕日に思う―「教学要綱」への疑問 ... <https://kitoma-sin.blogspot.com/2025/04/blog-post.html> を記し皆様にご案内しました。その後、池田先生の下記を拝読しました。

桜花の誓い 戸田先生のご逝去

2009.4.8 随筆 人間世紀の光 5

三類の 強敵倒して 勝ちにけり 恩師と共に 笑顔の創価よ

戸田先生のご逝去の翌日（四月三日）も、豊島公会堂で本部幹部会が行われた。恩師が生前、開催を厳命されていたのであった。私は、恩師が亡くなる数日前に叫ばれた獅子吼を、全同志に伝えた。「追撃の手を緩めるな！」破邪顕正の闘魂を失えば、嫉妬や忘恩の輩に、和合の世界は破壊される。

「月月・日日につよ（強）り給へ・すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」と戒められている通りである。だからこそ、我らは遺訓を永遠に忘れず、邪惡への追撃を続けるのだ。また、日興遺誠置文 - 謗法を呵責せずして遊戯雑談の化儀並に外書歌道を好む可からざる事。―

その結果、本日創価学会の日の深き意義を胸奥に拝し、宮田幸一氏が書いた「教学要綱」の完全なる不正を糾して、日蓮大聖人と三代会長の正義を護るために、池田門下生の使命と責務により、この度の拙文を記しました。

昭和30年、豊島公会堂の近くに住んでいた母は入信し、戸田先生の法華經講義へ私を背中にして通いました。先生ご逝去日の翌日、4月3日の講義と、8日のご葬儀にも行きました。生前の母は戸田先生の講義の素晴らしさを常に、語ってくれました。私は厳格な教学を心肝に染めることが出来ました。それ故、新刊の「方便品・寿量品講義」また、「御義口伝要文講義」での削除、改竄、そして「教学要綱」の不正は許せません。以下、本稿の目次です。

序論

1. 御義口伝 寿量品二十七箇の大事、第一の最重要文「この品の題目は日蓮が身に当たる大事なり、神力品の付嘱是なり」と「寿量品の事の三大事とは是なり」を「御義口伝要文講義」（以下「要文」と略）が無視、引用しないことへの破折。

2. 同上、第二十二の「自受用身」、第二十三の「久遠とは南無妙法蓮華經」、第二十五の「本尊とは、法華經の行者の一身の当体」の三つ、即ち、日蓮仏法の根本義をも「要文」が完全に無視したことへの破折。さらには、「要文」に掲載すべき重要な二つの口伝について

3. 「要文」が「釈尊は永遠の仏」と記すことは、宮田幸一氏が書いた「教学要綱」の主旨、釈迦本仏論と同じであることへの破折。

4. 池田先生の「法華經の智慧」に違背の創大名誉教授、宮田幸一、菅野博史、中野毅、3氏の論考への破折。

5. 日蓮大聖人の「一念三千の法門は、ただ法華經の本門寿量品の文の底にしずめたり」との文底解釈に違背する植木雅俊著「日蓮の思想 御義口伝を読む」他への破折。

6. 「要文」の削除、改竄15箇所の主要部を更に簡潔、明確化して揭示。

あとがき（所感） 結び

まずは、今回の拙文に対し、友人の中村誠氏より、適時、且つ、正義の論考を頂き、序論とさせて頂きました。中村氏に心より感謝申し上げます。

序論 宗教のアップデートとは何か？

最近、インターネット上で創価学会の教義のアップデートが盛んに囁かれている。— 科学がそうであるように、宗教もまた、時代の変化と共に教義を変化させていく必要があり、この流れについて来れない、宗門教学に執着する愚鈍な年寄り連中が、世界宗教の教義たる創価教学要綱を理解できず、批判し続けている — というものである。

だが、結論からいうならば、この人々こそが無知な連中であると言わざるを得ない。この人々に共通する欠けた視点は、宗教の普遍性である。彼らは、科学は時代と共に更新されるというが、1+1 が時代の変化とともに、3 になったり 4 になったりする道理はないのである。

こうした原理は普遍的でなければならない。同様に、宗教の教義には、時代に合わせて柔軟に変化させるものと、決して変えてはいけないものの二種類があることを知らないようだ。池田先生は次のように話されている。

「仏教はたいへん幅広い寛容性をもっています。仏教では、根本の教義についての変更は許されないが、枝葉末節のことにおいては、さまざまな時代・社会の風習に従って良いと教えています」(社会と宗教・上 普遍性と特殊性, p. 51) — と。

それでは時代の変化に影響を受けず、普遍的でなくてはならない根本の教義とはなんだろうか？池田先生は次のように話されている。— 「時代を超え、社会の制約を超えて変わらない宗教の「本質的なもの」を生かす。そうでない余分なものは分離する。(略)『本質的なもの』とは、私どもでいえば何か。御本仏日蓮大聖人への帰命である。

大聖人が説かれた三大秘法(本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目)に対する信心である。いわば根幹の化法である。『付随的なもの』とは、時代や場所によって変化する部分であり、とくに後世の形式・儀式すなわち化義等である」(『池田大作全集』第 84 巻 p. 335-336) — と。

「仏法では祈る対象が、最も重要になります」(『仏法と宇宙を語る』第 1 巻 p. 39) — と。

本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目、即ち、**祈りの対象となるべき教義に関しては、時代を超えて常に普遍的でなければならないというのが池田先生の教えである。**宗教の普遍性を捨てて、時代とともに根本の教義を変えた悪侶の代表が、戦時中、軍部権力に迎合した笠原慈行である。彼が主張した神本仏迹論（天照大神や八幡大菩薩等の神が本地で、仏は垂迹であるとする邪義）がまさにそれである。

池田先生は、笠原慈行を人間革命 6 巻推移の章で次のように批判されている。—「笠原慈行が、どんな日本精神を吹聴しようとも、それは自由である。しかし、**日蓮大聖人の嫡流を名乗る僧侶が、その根本教義を勝手に歪曲することは許されることではない**」（同書, p178)—と。

この問題は日蓮正宗の僧侶だけに当てはまる問題ではない。宗教指導者全員に当てはまる問題である。そして、根本の仏様に関して戸田先生は次のように主張されているのである。これは戸田先生が山本伸一青年を折伏する人間革命 2 巻屈指の名場面である。

「（南無妙法蓮華経は）根本の仏様のことであり、**永遠に変わらない本仏の生命の名前**です（略）末法という時代にはいっては、**その仏様は日蓮大聖人**」（同書, p. 221-222)—と。

「尊上無比の大御本尊は、じつに日蓮大聖人の御当体そのものであらせられるのである」（戸田城聖全集 3 巻、凡夫と御本尊, p. 63）この**永遠に変わらない本仏の生命の生命の名前、及び祈りの対象となる根本教義が、なんの説明もなしに密かに変えられている**のではないか、というのが**教学要綱、及びその影響下にある本の最大の問題**なのである。—と。

以上、中村氏の論考は正論であり、学会創立 9 5 周年、本年の真実の状況を、後世に記し置くための貴重な証言であると思います。



上記、中村氏の正論を頂いた直後の4月半ば、私は、宮田幸一氏が昨年3月に、自身のフェイスブック上で、「**教学要綱**」を作成したと明記した事実を知りました。以下の言質は、昨年10月18日、男子部教学室の配信に、全く齟齬する大嘘であり、驚愕しました。

— 2024年3月2日 この5年間にいろいろありましたが、私にとって最大の事は、池田先生の生前に、『創価学会教学要綱』を完成することができたことです。

これで完全に教義的にも日蓮正宗から独立したことが明示できたと思われます。完成に一助出来たことを今生の誉れとし、余生を後進への手助けに捧げようと思っています。

(宮田幸一氏の Facebook より)

10月18日、聖教電子版 一〈男子部教学室論考〉「教学要綱」は創価ルネサンスの集大成 的外れな“批判本”を破す。—

<https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B?sntoken=8adf6d02-2583-4ed9-a80c-d125adbab292> — には、以下あります。

一氏は、自身のホームページで「『創価学会教学要綱』に関する原田会長宛て書簡」を公開している。そのなかで氏は「『教学要綱』を作成した中心は、創価大学名誉教授の宮田・菅野両氏であると聞いております」と記しているが、これは事実と異なるものであり、**宮田・菅野両氏は刊行委員会には入っていない**。（注：氏とは須田晴夫氏のことです。図斉記）

『教学要綱』の編集作業は、あくまで教学部を中心として進められ、仏教史などの専門的知見に関しては学識者に諮問する形で行われたのである。それに対して、須田氏が、曖昧な伝聞情報を不特定多数が閲覧することができるホームページ上で公表することは、学会本部や刊行委員会および宮田・菅野両氏の名誉を毀損するものであるといえる。—と。

宮田氏は「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」と書かれた大聖人の曼荼羅を否定し、「私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からその記述(「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文)を除外すべきだと思っている」と主張し、日蓮大聖人その人を否定する暴論を吐いて須田氏に批判されています。(『創価学会教学要綱』と 日蓮本仏論の考察」 p.158)。

私は、宮田氏のこの暴言は御書に記された十悪(新341、全400頁)(新549、全477頁)の内の妄語、悪口、両舌であると同時に、法華経への十四誹謗(新1988、全1382頁)の内の、1. 驕慢、4. 浅識、6. 不解、7. 不信、10. 誹謗、に当たると断じます。

そして、そのような人が書いた「教学要綱」を池田先生が監修されますか？
否、監修されるはずがないです。そもそも「教学要綱」は誰が執筆者であるかも明記せずに発刊されました。これは社会的に通用しません。

私は、この1年半の間、「教学要綱」の論述に疑問を抱き続けて来ました。悩まされ続けたと言っても過言ではないです。学会に対して全幅の信頼をして活動してきたからです。今月、古希を迎え、10月に入信70年となります。「教学要綱」の不正を改めて欲しいです。

以下、本稿に入ります。

私は2月16日に、拙文 - 日蓮大聖人のご生誕日に思う - 「教学要綱」への疑問 - 「久遠元初自受用身」「人法一箇」が完全削除、又、カッコ内扱いする教学新刊書への疑問 - https://kitoma-sin.blogspot.com/2025/03/blog-post_21.html を記しました。

そして、その26-37頁において「御義口伝 要文講義」(以下「要文」と略)が、池田先生の「御義口伝講義」原本に全く相違した釈迦本仏論であることを15箇所、対比、提示して、皆様にご案内致しました。

(15箇所の主要部を、更に簡潔、明確化して本稿の最後6に掲示しました。)



その後、戸田先生の「方便品・寿量品講義」（戸田城聖全集第5巻）を拝読、その結果、私は池田門下生の責務と使命として、大聖人と三代会長の正義を護るためには、「要文」が画竜点睛を欠いた全くの不正の書であることを、再度、示すべきと、今回の拙文に至りました。

まずは、「御義口伝講義」の重要性について、戸田・池田両先生の思い、ご指導を心肝に染めたく存じます。池田先生は「御義口伝講義」（上、1頁）の序に於いて、次のように記されています。

一 日蓮大聖人の御説中の極説たる御義口伝を講義することは、もとより資性凡愚な私のよく耐え得るところにあらず、果たして御本仏の真慮に叶うや否や、ただただ恐懼（きょうく）の限りである。しかしながら、王仏冥合の機熟した今日において、日蓮大聖人の生命哲学を世に知らしむるべき時はない。また、**混迷せる現代思想の革命は、この大思想による以外にないと確信する**。ゆえに、敢えて上梓を決意した次第である。「御義口伝」は、日蓮大聖人の哲学の真髓であり、仏法の奥義を伝える相伝書である。ゆえに、この甚深の相伝は、晩年身延の沢にて、法華経要文を依文として、本因下種、文底独一本門の極説をば、嗣法たる御弟子日興上人に口伝せられ、筆述せられたものである。その内容は、天台大師、妙楽大師等の論釈を援用されつつ、妙法蓮華経の真髓を説き尽して、余すところなく、**釈尊五十年の説法も、この「御義口伝」を依拠として、初めて明確に理解せらるるところとなるのである**。

「御義口伝に云く」とは、日蓮大聖人の観心より、あらゆる生命論、宇宙観、社会原理を、信心に約し、縦横に説かれたものである。**この一言一句こそ、あらゆる思想、哲学、宗教を超越する偉大なる大哲学の極説といえよう**。—と。

また、同161頁には次のようにございます。

— **われわれにはなんの野心もない。ただ、民衆のため、人類のため、わが身を投げうって戦うのみである**。（中略）もしも、創価学会が、世間の批判、中傷を恐れて、広宣流布への戦いをやめたならば、あるいはまた、権力に迎合し、慈善事業などで民衆をあざむくとすれば、民衆の幸福は永久に没してしまうことだろう。

一触即発の戦争の危機がさらに深刻をきわめ、この地上に阿鼻叫喚の世界が現出することは、経文に照らし、明々白々たるものがある。

われわれは、断じて権力に迎合してはならない。言論界等に、よく書かれようとして、おべっかを使う見苦しい態度など、微塵もない。民衆をごまかしていくような卑きょうな真似もしない。あくまでも随自意なのである。右にも寄らず、左にも寄らない。ただ全民衆の幸福のために法旗を高く掲げて戦うのみである。—と。

私見、この「御義口伝講義」原本に記された池田先生の獅子吼を胸奥に拝する時、池田門下生の一人として、「要文」が、先生の記された原本から一番重要な記述を無視して、我流、釈迦本仏論に都合のいい文章だけを選び作文されたと判断し、大変な怒りをもちます。それゆえ、私は、池田先生の正義、真義を、後続の皆様に記し置くべきと決意、この度の拙文作成に至りました。

池田先生は、随筆 新・人間革命4(2001. 10. 19)「教学研鑽の喜び」「御義口伝」—で、以下、述べられています。—「御義口伝」は、日蓮大聖人の御講述を、日興上人が筆録された重書である。この「師弟一体」の御口伝書は、戸田先生と私にとっても、ことに思い出の深い御書である。師のもとで、私が教学を学び始めた時、まず「御義口伝」から入ったのである。—と。

そして、戸田城聖全集第5巻331頁「方便品・寿量品講義」—南無妙法蓮華経如来寿量品第十六—には、以下の論述があります。—

日蓮大聖人の仏法と釈尊の仏法の相違は、厳然たるものであります。その要が、どこにあるかと申しますれば、御義口伝がいちばん明らかであり、肝要であるとおもいます。御義口伝とは日蓮大聖人の法華経講義の口伝書であります。第二祖日興上人がお認めになった御書であります。血脈抄と同じく文底の仏法をとかれているのであります。

御義口伝巻下の大事の書き出しに、「第一南無妙法蓮華経如来寿量品第十六の事」(御書752頁)とあります。これがこの方便品寿量品の講義の根本であり、しめくりになる文であります。釈尊の説いたものは「南無」の字がなくて、「妙法蓮華経如来寿量品第十六」であります。

それでは、なぜ日蓮大聖人が、ここに「**南無**」とおつけになったかということですが、これが大事の肝要なのであります。「南無妙法蓮華經如来・・」と来たときには、この「如来」が南無妙法蓮華經の如来になるのであります。すると、これは**文底の仏になる**。妙法蓮華經如来寿量品の如来は**文上の如来**になる。この**日蓮大聖人の御読みになっている如来は文上の如来ではない**。こういうことがはっきりいたします。

「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」となっていますから、如来の本体とはなにかといえば、「南無妙法蓮華經」になってしまうのであります。ここに南無という二字をおつけになっただけで、如来という二文字の読み方が、ぜんぜん変わってくるのであります。(中略)「御義口伝に云く此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり」(同頁) 日蓮大聖人の御身に当たる大事とおおせられるわけは、「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」なのですから、南無妙法蓮華經の如来でなければ、如来ではないと立てられるというへんにあります。

その南無妙法蓮華經という如来を上行菩薩が受け取られ、**上行菩薩の再誕として、日蓮大聖人がひとまずおうまれになり、その如来を建立される**のであります。すなわち、三大秘法そのものが南無妙法蓮華經如来寿量品になってくるのであります。ですから日蓮大聖人の御身に当たる大事、**南無妙法蓮華經如来寿量品第十六**とおしたためになったのであります。一と。

戸田先生の「方便品寿量品講義」の下記指導も大変重要です。引用申し上げます。

326頁には、一古今の大学匠、**日寛上人は、すべての仏と南無妙法蓮華經如来寿量品の如来、すなわち、久遠元初の自受用報身如来(じじゅうほうしんによらい)との関係を「百千枝葉 同じく一根に趣(おもむ)くが如し」と説かれております**。すなわち文底の仏は一根であり、文上寿量品の仏は幹や枝、迹門の仏は花や葉であり、迹門や文上の仏は文底の仏に帰するのであります。文上の仏、迹門の仏はすべて如来寿量品の如来の分身仏であり、一根から出た随他意の仏であり、釈迦仏法の人々をしてのみ歎喜せしめる仏であります。(中略)それでは、なぜ、日蓮大聖人の仏法からみると、迹門にあたる釈尊の寿量品をわれわれが読むのか、日蓮大聖人が読ませるのかといえば、われわれが読む寿量品は、日蓮大聖人の**御内証の寿量品**なのであります。一とございます。そして、久遠元初の自受用報身如来につきまして以下のように記されております。

376頁には **一大聖人は、久遠元初の自受用報身如来**であられます。それが第一番には五百塵点劫の釈尊と現れ、あらゆるところに久遠元初の自受用報身如来の慈悲を垂れられ、衆生を見られて、特にこの末法へ大聖人がお現われになった。この原理は五百塵点劫に仏がおった。

その中間には然燈仏(ねんとうぶつ)があり、その然燈仏と関係した儒童菩薩が釈迦如来として生まれた。われわれが大聖人を拝し奉れば、末法になってお現われになったのだと思うが、本当はそうではないのであります。久遠元初という時に、すでに地水火風空なりと知(しろ)しめして即座にお悟りになった仏なのであります。それが種々の仏として、ご自身がお出ましになり、迹を垂れられ、使いをよこされた。そうして、末法に、ご自身がここへお現われになった。中間の仏はことごとく、わが分身仏であり、迹仏であります。みな久遠元初の自受用報身如来の息のかかったものであります。末法に大聖人が出現されたことについては、このように拝さなければなりません。— と。

長文ですが、日蓮仏法、そして、「御義口伝」の根本義でありますので、引用申し上げます。

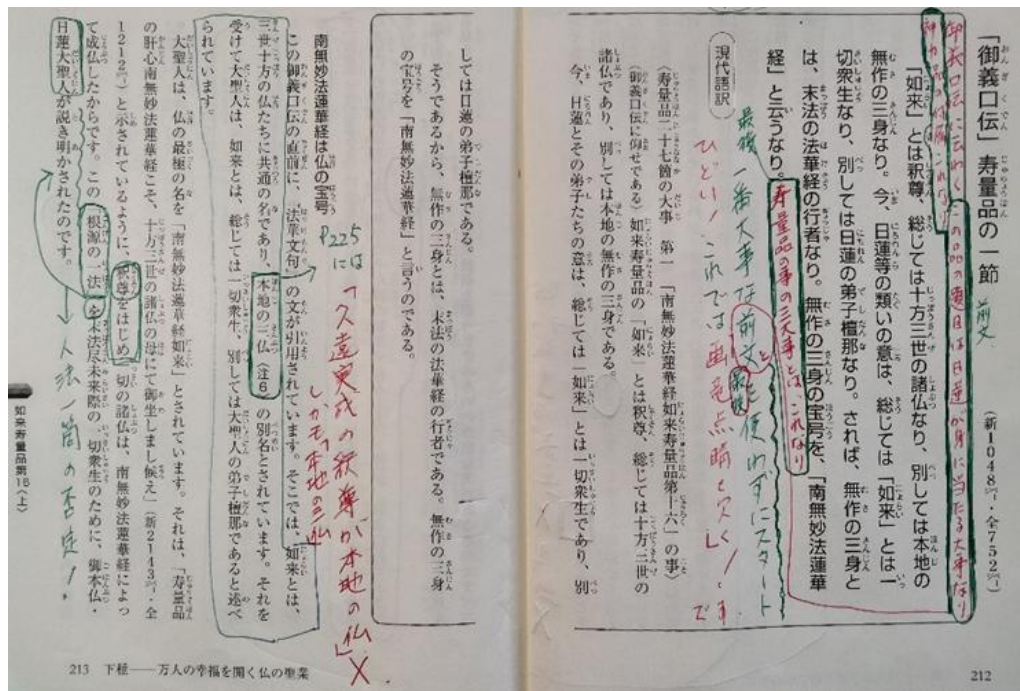
今回の拙文の最大の目的は、前回示せなかった「要文」の最大の不正を示し、これでは池田先生の御義口伝の本義とは言えない！と糾すことです。それを、目次に沿って、以下、論述します。

1. 御義口伝 寿量品二十七箇の大事、第一の最重要文「この品の題目は日蓮が身に当たる大事なり、神力品の付嘱是なり」と「寿量品の事の三大事とは、是なり」を「御義口伝要文講義」(以下「要文」と略)が無視し、引用しないことへの破折。

「要文」の不正は、「原本」の下記、青字の重要部を無視、引用せず、に、次頁に該当の箇所を掲示したように、その論調は全くの文上解釈であり、いきなり—「如来」とは釈尊—と、論述を開始していることは、「要文」が画竜点睛を欠いている何よりの表れです。

寿量品二十七箇の大事 第一南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事

文句の九に云わく如来とは十方三世の諸仏、二仏・三仏・本仏・迹仏の通号なり。別しては本地三仏の別号なり。寿量とは十方三世・二仏・三仏の諸仏の功德を詮量す。故に寿量品と云うと。御義口伝に云く、この品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱是なり。如来とは釈尊・総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地の無作の三身なり。今、日蓮等の類いの意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮の弟子檀那なり。されば無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり、寿量品の事の三大事とは是なり。 10/75



「要文」(212, 213頁)が「原本」に対し違背、改竄の最も端的な象徴。

上記の文例は「要文」が戸田・池田両先生が終始一貫された日蓮仏法の本義の解釈である「法華経の文底からの拝読」に完全に違背した不知恩の証拠です。何故、その重要部を削除して学会員をごまかすのか。怒りしかありません。以下それを破折します。

戸田先生は — 日蓮大聖人の御身に当たる大事とおおせられるわけは「南無妙法蓮華経如来寿量品第十六」なのですから、南無妙法蓮華経の如来でなければ、如来ではないと立てられるへんにあります。その南無妙法蓮華経という如来を上行菩薩がうけとられ、上行菩薩の再誕として日蓮大聖人がひとまずお生まれになり、その如来を建立されるのであります。

すなわち三大秘法そのものが南無妙法蓮華経如来寿量品になってくるのであります。ですから日蓮大聖人の御身に当たる大事、南無妙法蓮華経如来寿量品第十六とおしたためになったのであります。一と、日蓮大聖人の御身に当たる大事の甚深の意義を教示されています。(戸田城聖全集第5巻法華経方便品・寿量品講義 p332頁)

次の神力品の付嘱是なりについては「**原本**」(下) 19 頁で、**池田先生は**— 神力品第二十一 (581 頁) には「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於いて宣示顕説す」と説かれている。これを天台は、四句の要法といい、結要付属の文としている。

だが、文底の義によって、この文を判ずるならば、**ここに厳然と三大秘法が付属されたことが明確**となる。三大秘法抄 (1021 頁) には、この神力品第二十一の文を引用したあと「問う所説の要旨の法とは何物ぞや、答えて云く夫れ釈尊初成道より (中略) 実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」とある。「実相証得の当初」とは、五百塵点劫の当初と同意であり、久遠元初の事である。(中略) **神力品第二十一で付属された実体は寿量品第十六の文底に説かれたのである。一と。**

また「**原本**」(下) 16 頁で、**池田先生は**— 南無妙法蓮華經如来寿量品について— **南無妙法蓮華經如来、すなわち文底の仏の寿量品である。釈尊の文上の寿量品と区別して大聖人の立場、すなわち文底より読むがゆえである。文底の仏とは日蓮大聖人であらせられる。**

日蓮大聖人が「予が読むところの寿量品」と仰せられる、内証の寿量品である。南無妙法蓮華經如来は人、寿量品は法で、**人法一箇をあらわす。**これは文中「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」とあることによっても、明白である。一と。

さらに、日蓮が身に当たる大事については、「**原本**」(下) 18 頁で**池田先生は**、— 南無妙法蓮華經如来寿量品第十六という題号は、日蓮大聖人御自身のことを説いた肝要の法門である、ということ。南無妙法蓮華經如来とは、即日蓮大聖人の御事であり、その寿量品とは、内証の寿量品、文底の寿量品であり、その所詮は三大秘法そのものである。次下に「寿量品の三大事とは是なり」とあるとおりである。ゆえに「日蓮が身に当る大事」と仰せられたのである一と。

寿量品の事の三大事とは是なりについては、「**原本**」(下) 20 頁で、**池田先生は**、一事とは、事実の上に仏界が顕現されることが説かれる。事の一念三千。法華經迹門は理、本門は事である。

だが、一重立入って論ずれば、釈尊の文上の法華経は、本迹ともに迹であり、理である。ただ文底神秘の大法を独一本門・事の一念三千と名づけるのである。日蓮大聖人は、この事の一念三千の当体として、一幅の大曼荼羅を御図顕なされたのである。これ本門の本尊一大秘法であり、開けば三大秘法となる。—と。

以上、池田先生は、この第二十一において、日蓮仏法に根本義をご教示されているのです。これを無視した「御義口伝要文講義」は画竜点睛を欠いていると断言します。

2. 寿量品、第二十二の「自受用身」、第二十三の「久遠とは南無妙法蓮華経」、第二十五の「本尊とは、法華経の行者の一身の当体」の三つ、即ち、日蓮仏法の根本義も「要文」が完全に無視したことへの破折。及び、「要文」に掲載すべき重要な二つの口伝について。

まず、この三つ、第二十二、第二十三、第二十五も日蓮仏法の最奥義なのです。これを完全に無視、「要文」に掲載しないのは、これまた、本当の「要文」とは言えません。皆様、その重要さについて下記を拝読、ご高見下さい。

第二十二 自我偈始終の事

御義口伝に云わく、「自」とは、始めなり。「速成就仏身（速やかに仏身を成就す）」の「身」とは、終わりなり。始終、自身なり。中の文字は受用なり。よって、自我偈は自受用身なり。法界を自身と開き、法界自受用身なれば、自我偈にあらずということなし。自受用身とは、一念三千なり。伝教云わく「一念三千即自受用身。自受用身とは、尊形を出でたる仏なり」。「尊形を出でたる仏」とは、無作の三身ということなり云々。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者、これなり云々。

池田先生の「原本」（下）237－238頁には一自我得仏来の自と、速成就仏心の身で、この自我偈は全体として、日蓮大聖人御自身のことが説かれているのである。また、自身とは真実の生命の主体であり、これを説き示したのが、自我偈である。

始めの自と終わりの身とを除いた、中の文字は、すべて、自身の振舞い、活動であり、受用となる。したがって、自我偈とは、自受用身ということに為るのである。(中略) ここにいう自受用身とは、久遠元初の自受用身であり、日蓮大聖人の御内証であり、即人本尊を示されている。また一念三千とは、開目抄に一念三千文底秘沈とあるごとく、文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華經、即ち、法本尊である。しかして「自受用身とは一念三千なり」とは、人法一箇を示され、日蓮大聖人の御生命は、まったくこれ一念三千の大御本尊であり、一念三千の大御本尊は、まったくこれ、日蓮大聖人の御生命であることを説かれたのである。釈尊は法勝人劣であり、日蓮大聖人の場合は、人法一箇である。本尊とは優れたるを用うべきであり、したがって釈尊を本尊としてはならない。一と。

第二十三 「久遠」の事

御義口伝に云わく、この品の所詮は「久遠実成」なり。「久遠」とは、はたらかさず、つくろわず、もとのままという義なり。無作の三身なれば初めて成ぜず、これ働かさざるなり。三十二相八十種好を具足せず、これ繕わざるなり。本有常住の仏なれば、本のままなり。これを「久遠」と云うなり。「久遠」とは、南無妙法蓮華經なり。実成、無作と開けたるなり云々。

池田先生の「原本」(下) 245頁には一ここに説き明かされる久遠実成とは、通途の意味とはまったく違い、南無妙法蓮華經如来の寿量品における久遠実成である。したがって、ここにいう久遠とは、久遠元初と同意であり、はたらかさず、つくろわず、もとの儘の義である。実成の実も、無作三身の仏ということであり、成も、成るということではなく、開く義となる。(中略)久遠といえば、一般的には「時の無窮なこと」「遠い昔」あるいは「永遠」ということである。

しかるに久遠元初の久遠とは、これらの時間的觀念を含めて、大宇宙の本源、生命の本源との意味である。すなわち、無作本有常住の生命、無始無終の生命の本体であり、それは、久遠元初の自受用身如来の御生命それ自体である。これはまた、即南無妙法蓮華經であり、したがって本文には「久遠とは南無妙法蓮華經なり」と結論あそはされているのである。

三世諸仏総勘文抄(568頁)にいわく「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめて即座に悟を開き給いき、後化他の為に世世・番番に出世・成道し在在・処処に八相作仏す」と。

「釈迦如来」とは、決して本果第一番成道の釈尊ではなく、名字凡夫位の釈尊、すなわち久遠元初の自受用身如来である。「五百塵点劫の当初」とは久遠元初のことである。「我が身は地水火風空」は我が身全宇宙ということである。これ、日蓮大聖人の久遠元初の成道であり、日蓮大聖人が、無始無終に、無作三身の当体として常住であることを説かれた御文にほかならぬ。一と、ございます。

第二十五 建立御本尊等の事

御義口伝に云わく、この本尊の依文とは、「如来秘密・神通之力」の文なり。戒・定・慧の三学は、寿量品の事の三大秘法これなり。日蓮たしかに靈山において面授口決せしなり。本尊とは、法華經の行者の一身の当体なり云々。

池田先生の「原本」(下)「原本」256—258頁には一如来秘密神通之力の文が、大御本尊の衣文であるとは「第二如来秘密神通之力の事」の中で述べたごとく、如来秘密は、中央の「南無妙法蓮華經 日蓮」をあらわし、神通之力は、左右の十界三千をあらわすのである。如来秘密は体の三身、神通之力は用の三身であり、共に日蓮大聖人の一身および心具の一念三千であり、大御本尊それ自体なのである。されば、御文に「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」と仰せられたのである。(中略)しかして、このように釈尊より上行菩薩として付属を受けたのは、いまなお外用の立場であり、さらに、深く御内証の辺より論ずれば、日蓮大聖人は、釈尊をはじめ、十方三世の諸仏を出生し、これらの仏の一同に帰一していくべき、久遠元初の自受用身の再誕であられる。

この立場より論ずれば、あの靈鷲山会の儀式は、教相の辺、文上の辺は論外として、観心の辺、文底の辺より論ずれば、全く久遠元初の儀式であり、釈尊より口決相承したという、この釈尊は、久遠元初自受用身如来であらせられる。上行菩薩として付属を受けたとは、生命論からいえば、上行とは我をあらわし、三世常住に続きゆく生命の本質に、久遠元初自受用身の生命を受け継がれた御本仏が、末法に、日蓮大聖人とあらわれ給うたか。(中略)

最後の「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」の御文は非常に重要である。大聖人の一身の当体が即御本尊なのである。大聖人が末法の人本尊であるとの厳然たる証文でなくして何であろう。これほどまでに、日蓮大聖人は、末法の衆生の信仰すべき御本尊を説き明かされているのに、身延派日蓮宗では、いまなお釈尊を本尊としている。まさに仏の金言を踏みにじる姿であり、不知恩の畜生といふべきである。一と。

以上、寿量品における、**池田先生**の最重要3つの御義口伝講義を、無視、削除した「**要文**」は、何度も言いますが、**画竜点睛を欠いているとしか言えません**。何故に、**日蓮大聖人の根本義を解説された、池田先生の「御義口伝講義」の原本**の、その中でも最も重要な講義を外すのですか？ これでは「**要文**」ではないです。

次に、「**要文**」として記し置きすべきと考える以下の二つをご紹介します。

一つは—「**原本**」(下) 471頁には一神力品八箇の大事
第一妙法蓮華經如来神力の事

文句の十に云く神は不測に名け力は幹用に名く不測は即ち天然の体深く幹用は則ち転変の力大なり、此の中・深法を付属せんが為に十種の大力を現ず故に神力品と名くと。**御義口伝に云く此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ざるなり**。
(以下省略)

475頁で—**池田先生は**—(通解) 御義口伝には、次のように仰せである。

この妙法蓮華經如来神力の妙法蓮華經とは、釈尊の妙法ではない。なぜなら、すでにこの神力品第二十一で上行菩薩に付属されているからである。総じて、妙法蓮華經を上行菩薩に付属される儀式は、宝塔品第十一の時に始まり、寿量品第十六の時に付属するところの法体が顕れ、神力品第二十一および囑累品二十二の時に一切の付属の儀式は終了するのである。(以下省略) —と。

*この御義口伝を外して、どうするのですか！です。

二つ目は—「**原本**」(下) 769頁には一普賢經五箇の大事
第五正法治国不邪枉人民の事

御義口伝に云く**末法の正法とは南無妙法蓮華經なり**、此の五字は一切衆生をたばらかさぬ秘法なり、正法を天下一同に信仰せば此の国安穩ならむ、されば玄義に云く「若し此の法に依れば即ち天下泰平」と、此の法とは法華經なり**法華經を信仰せば天下安全たらむ事疑有る可からざるなり**。

已上二百三十一箇条の大事

771頁で―池田先生は―（通解）日蓮大聖人の仰せには、次のように申されている。末法の正法とは、三大秘法の南無妙法蓮華經である。この南無妙法蓮華經は、全民衆をたぼらかさない、根底的に救いきっていく秘法である。この三大秘法の南無妙法蓮華經を全民衆が心をつにして信仰していくならば、日本の国も、世界も、安穩になっていくことは絶対である。

ゆえに、天台大師は法華玄義に「もし、この法を根幹としていくならば、天下は泰平となる」と述べている。天台のいう「この法」とは、法華經すなわち南無妙法蓮華經である。この南無妙法蓮華經を信仰するならば、世界は平和になっていくことは、疑いないのである。

775頁で、池田先生は―（講義）正法を天下一同に信仰せば此の国安穩ならむ 王仏冥合の依文である。「正法を天下一同に信仰せば」とは、すなわち仏法である。「此の国安穩ならむ」とは、王法である。安穩とは、国家、社会、世界が平和になることであり、依報たる国土世間も、地震や台風、あるいは旱魃などの災害に襲われない、平穩な国土になることを意味する。

ここで、「正法を天下一同に信仰せば」と仰せの如く、王仏冥合といっても、根本は全民衆が、この三大秘法の大御本尊を信仰することである。すなわち、折伏こそ、国土を安穩ならしめ、民衆の幸福と、世界の平和を実現しゆく原動力であることを知らなければならない。―と。

私は、上記二つこそ日蓮大聖人の最重要の口伝です。平和論なのです！この二つは、池田先生の「原本」（上）の序の獅子吼（本拙文5頁に引用）を、さらに明確にされた講義と拝します。ゆえに、「要文」がこの二つを無視したことは、大聖人と池田先生の本意を無視したと思います。

3.「要文」は「釈尊は永遠の仏」と何度も記すが、それは、「教学要綱」と同じ釈迦本仏論であることへの破折。

池田先生の原本に比べ、大白蓮華の単行本化である「要文」では、一釈尊は永遠の仏―と何箇所にも記されていて、これは「教学要綱」と全く同じです。以下、「要文」を掲示、引用します。

(注4) アツタのことは スッタニパータ (中村元訳、岩波書店) から。
 (注5) 「久遠実成の仏」この世ではじめて成仏した始成正覚の仏に対し、**釈尊**は実は五百塵点劫という
 ダメ久遠の過去に成道して以来の**永遠の仏**であるということ。法華経本門寿量品で明かされた。
 (注6) 「本地の三仏」「本地」とは、本来の境地のこと。ここでは、久遠実成の**釈尊**が本地の仏であり、
 しかも、その「身」法身・報身・応身の三身を具えていることを「本地の三仏」という。
 (注7) 「即身成仏」35ページ参照。

いよいよ、法華経の「本門の肝心」(新1373ページ・全1016ページ)たる如来寿量品第16の
 御義口伝に入ります。最初に、南無妙法蓮華経の下種仏法こそ、末法の肝要であることを
 学びます。

永遠に戦い抜く最も崇高な人間
 如来寿量品の「如来」とは、仏の十号(注3)の第一です。「真如(真実)」から来た」と
 の意であり、真如に住するのみではなく、衆生の前に現れ来つて、衆生を導くために教え
 を説く存在と言えましょう。

釈尊は、「一切の生きとし生けるものは、幸せであれ」(注4)との言葉の通り、一生
 涯、どこまでも一切衆生の幸福のために行動し続けました。

そして、その仏の闘争は、今世だけでなく、久遠以来、尽未来際まで**永遠**であることを
 示しているのが、寿量品で説かれる久遠実成の**仏**(注5)です。しかも、結論から言え
 ば、この久遠の仏は、どこまでも現実の人間を離れた存在ではない。久遠の生命に目覚
 め、民衆を救う大法を説き、永遠に戦い抜く最も崇高な人間です。この「人間のための宗
 教」の極理が示されているのが、御義口伝の「南無妙法蓮華経如来寿量品第十六」の
 事」です。

この題号では、それまでの各品と異なり、品名に題目の七字が冠されています。さらに
 大聖人は「この品の題目は日蓮が身に当たる大事」(新1048ページ・全752ページ)と明かさ
 れ、次の御文でその真髓を示されています。

を聞く仏の聖業



上記(210, 211頁)は最悪の邪義です。
 結論、法華経の論述は**永遠**ではなく**2倍の有限**で
 す。「教学要綱」と「要文」が「**釈尊は永遠の
 仏**」とするのに対して、池田先生は「**法華経の智
 慧**」において、「**永遠の仏**」は**日蓮大聖人**であると
 明言されています。

ゆえに「**教学要綱**」「**要文**」共に、日蓮大聖人
 と三代会長への不知恩、背信の作文と断じます。
 また、その参考として須田晴夫著「**新法華経論
 現代語訳と各品解説**」の寿量品の解説が一番分か
 り易く、その根本義は池田先生の『**法華経の智
 慧**』と同じ正論ですので下記に引用します。

寿量品は、釈迦仏の成道をもたらした因について述べている。

「諸の善男子よ。私（釈迦仏）が、もとは菩薩の道を行じて成就した仏の寿命は、今でも尽きていない」と。すなわち、釈迦仏は五百塵点劫の時点で成道する以前には菩薩道を行じていたというのである。菩薩道を行じていたのであれば、当然菩薩としてその時に行っていた法がなければならない。釈迦仏はその法を行ずることによって、すなわちその法を師匠とすることによって成仏したのである。つまり、釈迦仏を仏にさせた根源の法が実在することを寿量品は示している。

その根源の法は、もちろん釈迦仏だけの師ではない。釈迦仏がその法を師として成仏したということは、万人がその法を師としていくならば、釈迦仏と同様に誰もが成仏できることを意味している。その意味で寿量品は、釈迦仏を手本とすることによって、万人の成仏の道を示そうとしたのである。もちろん寿量品は根源の法が何かということを示してはいない。しかし、寿量品を聞いた人々は、久遠の昔における釈迦仏の成道という内容に触れることによって、釈迦仏を含めてあらゆる仏を仏ならしめた根源の法が存在することに気づくこと

ができたのである。

最重要の論述

寿量品が暗々裏に示した根源の法については、法華經の思想を体系化した天台大師も、またそれを継承した伝教大師も、なお明らかに示すことはなかった。彼らの限界を超えて、その法を初めて明らかに示したのが日蓮であつた（日蓮は天台・伝教等について、内心においては根源の法を覚知していたが、時代的な制約などからそれを人々に示すことがなかったと位置づけられている）。すなわち、日蓮は諸仏を成道せしめた根源の法（それは不可思議なる法という意味で妙法とも呼ばれる）を南無妙法蓮華經と名づけ、それを行ずることで万人が成仏する道を開いたのである（具体的には、日蓮は南無妙法蓮華經と唱える唱題行を示し、また南無妙法蓮華經を曼荼羅本尊として顕すことによつて、能力や立場を問わずあらゆる人が妙法を行ずることのできる方法を明らかにした）。

万人の成仏を説いた法華經の思想は、日蓮の出現によつて初めて最終的な到達点に達したといえよう。

日蓮は「開目抄」で「一念三千の法門は、ただ法華經の本門寿量品の文の底にしずめたり」（二八九頁）として、根源の法は

法華經の文上には示されておらず、「文底」に沈められているとする。その「文底秘沈」の文とは何かと言えば、それは釈迦仏成道の本因を明かした「我本行菩薩道」の文に他ならない。

ところで寿量品は、釈迦仏が五百塵点劫という思惟を絶する長遠の過去に成道したと説くことによつて、ほとんど永遠常住の仏身を示したが、それでも五百塵点劫という一つの時点において釈迦仏が成道したという基本的な構造は動かすことはできない。いかに長遠の昔に成道したといつても、釈迦仏は元来、仏でなかったものが、ある時点で仏に成つた存在（いわば「仏にさせてもらった存在」）なのである。その設定そのものが、先に述べた通り、釈迦仏を成仏せしめた「根源的なもの」の存在を示している。

つまり、寿量品に説かれる五百塵点劫成道（久遠実成）の釈迦仏は一応の本仏に過ぎず、真実の根源仏ではない。厳密に言えば、根源の妙法によつて成仏させてもらった迹仏に他ならない。それに対して日蓮は、妙法（南無妙法蓮華經）と一体の根源仏を「百六箇抄」や「御義口伝」等で久遠元初自受用報身

如来ないしは無作三身如来として提示した。しかもその根源仏が妙法を信受する万人の上に現れることを教示したのである。そこに、五百塵点劫成道の釈迦仏しか示せなかつた釈迦仏法と、根源仏まで明示した日蓮仏法の相違があるといえよう。

寿量品は久遠実成の釈迦仏を説くことによつて本仏（統合仏）と迹仏（分身仏）の相違があることを提示し、さらに久遠実成の釈迦仏を通して根源の妙法を人々に覚知させようとしたのである。

また、久遠実成の釈迦仏も無限に存続するものではない。その仏の寿命について寿量品では「その寿命はこれまで過ぎてきた時間の倍である」として、長遠ながらも有限のものと説いている。すなわち久遠実成の釈迦仏も、一応は久遠の仏とされるが、実際には無始無終の存在ではないことに留意しなければならぬ（真に無始無終の仏であるならば、その仏は不滅の存在となるから、仏の「滅後」はありえない。しかし、寿量品以降も分別功德品等で釈迦仏の滅後が説かれている）。

上記、須田晴夫氏の論述に、**日蓮仏法の最奥義**が簡潔、明瞭に記されています。私は、これほど見事で素晴らしい論述はないと思っています。それは、この数年私が「法華経」に関する数十冊の本を読んだ結果です。読んだ本は以下です。



「法華經の智慧」第4巻の92，93頁には以下記されています。

如来寿量品から—「是の如く、我成仏してより已来、甚だ大いに久遠なり。寿命無量阿僧祇劫なり。常住にして滅せず。諸の善男子、我れ本、菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず。復上の数に倍せり」(法華経 500 頁)

(訳)このように、私(釈尊)が成仏してからこれまで、実に久遠の時が経過している。その寿命は無量阿僧祇劫(五百塵点劫)という長い時間であり、この世界に常住して滅することがない。善男子たちよ。私が、もと菩薩の道を実践して成就したところの寿命は、今なお尽きていない。さらに、先に述べた五百塵点劫に倍して続くであろう。

結論、「法華經の智慧」以外の書籍は、釈尊が五百塵点劫の時点に、**日蓮大聖人****即南無妙法蓮華經の本因によって成道し得たこと**を理解していません。また、釈尊の寿命は「**2倍**」の**限定であること**も、大聖人が末法において人法一箇の御本尊を顕わされたことの真義も分からず、**文上読みの釈迦本仏論に固執しています**。さらに、釈迦が永遠だとして、大聖人が曼荼羅御本尊への唱題を民衆に始めて教示されたことなど知るべくもない浅薄な邪義なのです。

『法華經の智慧』第4巻56－58頁には一小題「**釈尊の師は南無妙法蓮華經如来**」として、「**永遠の仏**」について、池田先生のご指導が、以下、厳然と記されています。

名誉会長 法と人(仏)は、本来、不可分なのです。「如来」というのも「如(真如・真実の世界)からやって来たもの」ということです。すなわち「如来」とは、真実の「法」が現実の上に表れたのです。宇宙生命に“人”の側面と“法”の側面があり、それが一体なのです。少し難しいかもしれないが、大事なところなので、もう少し言っておこう。釈尊の説法に「法を見る者は我を見る、我を見る者は法を見る」という言葉がある。法を体得すれば釈尊に会うことができ、釈尊に会えば法を悟れるという意味です。「我を見る」の「我」とは、根本的には「永遠の法」と一体となった「**永遠の仏**」です。

寿量品では、永遠なる「常住此説法(常に此に住して法を説く)」(法華經506頁)の仏身を説く。文上の法華經では、五百塵点劫以来の「**久遠実成の釈尊**」のことだが、その指向しているのは無始無終の「**久遠元初の仏**」です。釈尊が悟った「永遠の法」即「**永遠の仏**」は、あらゆる仏が悟った「永遠の大生命」であった。過去・現在・未来のあらゆる仏は、ことごとく**釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟った**のです。

それが久遠元初の自受用身であり、南無妙法蓮華經如来です。戸田先生は言われた。「**日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのです。これを久遠元初といいます。**始めもなければ、終わりもないのです。大宇宙それ自体が、大生命なのです。」と。無始無終で慈悲の活動を続ける、その大生命体を「師」として「人間・釈尊」は人間のまま仏となったのです。そして、悟ったとたん、三世十方の諸仏は皆、この人法一箇の「**永遠の仏**」を師として仏になったのだとわかったのです。一と。

また、『**生命と仏法を語る**』(池田大作全集第11)第七章 生命の法理「蓮華」等覺——光彩を放ちつつ昇る太陽の「法」——では以下、述べられています。

池田 今度は、**釈尊の仏法**は、「大集經」という經文でいわれているのですが、正法年間、像法年間の約二千年でまったく効力を失い、**末法の衆生とはまったく縁なき「法」**となる。末法の時代に入ってから、その末法の仏が説く「法」によって結縁され、成仏していく以外ないということになるのです。そして、ご存じのとおり、末法に入って日蓮大聖人の御出現があり、末法万年を志向されて、多くの宗派との法論のうえからも証明された「大法」を樹立されたわけです。その法こそが、**久遠元初より無始無終**であり、**永遠**にわたる真理である「**南無妙法蓮華經**」という、仏法の極説中の極説の「法」となり、**即一冊の御本尊となるわけです。**

屋嘉比 その御本尊に、仏法のすべてが凝結されているわけですね。

池田 そのとおりです。ですから、過去も、現在も、未来も、また一切の因果も超克し、かつ一切を強力に発現しゆく本源の大法則こそ、「南無妙法蓮華經」といえるのではないでしょうか。この御本尊に帰命しゆくときのみ、私どもの生命も、久遠元初の若々しい生命として輝き、広がりゆく。ゆえに、私どもの過去遠遠劫からの罪業を、一生のうちに転換せしめゆく方程式がここにあるわけです。

屋嘉比 なるほど。

池田 こうして釈尊の仏法は、すでに使命が終わった。そのようないくつもの理由から、「本果妙」の仏法となるわけです。それに対し、第六章でも少々論じさせていただきましたが、日蓮大聖人の仏法を「本因妙」とたてます。 —と。

この「法華經」の最大の論点である「永遠の仏」については、私の友人、中村誠氏の下記の論考は正鵠を射ています。

一 釈尊の寿命とは有限なのであろうか、無限なのであろうか。『教学要綱』の主張と戸田・池田両先生の主張はどちらが正しいのか。これは法華經の原本に当たってみるほかない。釈尊の寿命が無限か有限かの決定的な答えとなるものは次の經文にある。「私(釈尊)がもと菩薩の道を実践して成就した寿命は、今日もなお尽きることなく、また上述の数の二倍の年数がある」
(三枝充恵『法華經現代語訳』 p. 372)

ここで非常に重要な点は、法華經が釈尊の寿命を二倍していることだ。教学要綱の主張するように、釈尊の寿命が永遠の過去から常に存在する仏であるならば、その寿命を二倍するという数学上意味のないことを法華經は行っていることになる。無限を二倍しても無限であるし、無限を無限倍拡大してもやはり無限であり、これほど無意味な操作はない。

即ち、法華經を絶対視するならば、五百塵点劫とは無限に近い数ではあるが、その本質は有限でなければならない。そして、釈尊が菩薩の道を実践していたそれ以前は何をしていたかという、開目抄に「不輕菩薩は、過去に法華經を謗じ給う罪身に有るゆえに、瓦石をかぼるとみえたり」 —とある。即ち、釈尊が謗法を犯していた時代に達する。これではとても永遠の仏とは言えない。

もう一度池田先生の主張を見てみよう。「(久遠実成の釈尊は)無始無終の宇宙即妙法と一体とは言えない。’ ’ すき間’ ’ がある」(『法華經の智慧』第5巻 p. 277)。正にその通りではないか。即ち、釈尊の寿命とは無限に近いとはいえ、その実態は有始有終の仏である。

池田先生は次のように述べている。「では永遠の仏を説くにはどうすれば良いか」といって、『仏因』に『仏果』を認めなくてはならない」(『法華經の智慧』第5巻 p. 212)。「この「因位(仏因の位)の仏」——それが上行菩薩です。『因果俱時の仏』です。上行菩薩が出現しなかったならば、無始無終の本仏は示せないのです」(同書 p. 212-213)。即ち、究極の仏の形態とは、釈尊のような金ピカの仏ではなく、因果俱時の仏、菩薩仏でなければならないのだ。

御義口伝にはこうある。「**末法の仏とは凡夫なり、凡夫僧なり**」。いかに池田先生の洞察が鋭いか、そして御義口伝の素晴らしさもこれで理解できるのではないかと思う。一方で『**教学要綱**』は何と述べているか。「**永遠の仏**」(p. 28)と説いておきながら、「**釈尊をはじめとして、あらゆる仏は『法華經』によって仏となった**」(p. 81)と言う。この支離滅裂さは一体何なのだろうか。

池田先生の『法華經の智慧』第5巻の言葉を借りるならば、「『仏因』が先にあって、『仏果』が後に来るというのでは、どうしても、’ ’ 何らかの時点で’ ’ 仏が出現することになる」(同書 p. 212)となる。『教学要綱』の主張は誤りである。もはやこの時点で学術書としては失格であり、また、今までの教学をリセットする価値など全くない、単なる邪宗身延の主張の劣化版であることがこれだけで証明されてしまったことになる。

須田氏は「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」において、「久遠実成の釈迦仏は南無妙法蓮華經によって仏にさせてもらった仏であるから根源の仏ではない。また五百塵点劫という一時点において初めて成道した仏であるから無始の存在でもない」(同書 p. 16)と主張しているが、正にその通りだろう。

『創価学会教学要綱』の主張は完全に間違いである。一と。

さらに、中村氏は「**要文**」の不正に対して、以下の論考を寄せてくれました。

「要文」が、「この品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱なり」を引用しないで、いきなり「如来」とは釈尊一と、開始している件ですが、やはり法と仏を切り離してやろうという意図のもとに本を執筆しているということが言えると思います。しかしながら次の御文と明らかに矛盾しています。

大聖人は「法蓮抄」で、天台のことば一妙法蓮華經一帙・八軸・四七品・六万九千三百八十四。一々文々これ真仏なり。一を引用され、一今の法華經の文字は皆、生身の仏なり一と記されています。この真仏とは、釈迦でなければいけないということです。単法でないのは明らかで、最もわかりやすい御書はこれだと思います。また、「法華經は釈迦仏の御いろ、世尊の御ちから、如来の御いのち」（衣食御書）と、はっきりおっしゃられています。法華經は釈迦のいのちであると。そうであるならば、法と仏をどうして切り離すことができるのか、という議論になります。人法一箇です。一と。 私は、正論と拝します。

*私見、中村氏のこの「人法一箇」の論考は、初見ですが、玉稿です！

私は、大聖人様が法華經を称えて釈迦を最大に尊重されたのに対し「要文」は著者を池田大作先生としながら、日蓮大聖人の口伝を削除するという暴挙をしているゆえに、大聖人様のお心を踏みにじっていると断言します。

池田先生は「法華經の智慧」第1巻138頁で、下記、結論されています。一日蓮大聖人は虚空会の儀式を借りて、御自身の内証の悟りを御本尊に示してください。この御本尊を信受している私どもこそ、法華經のダイナミズムを、そのまま生活に反映させているのです。これまで歴史上、どれほど世界の多くの人々が法華經を学び、読誦してきたか計り知れない。

しかし、私どもこそが、法華經の本義を生きているのです。

その栄光と誇りを自覚したい。一と。

上記、池田先生の獅子吼こそが、創価学会の永遠の依処であり、私どもの誇りなのです。私は「法華經の智慧」は現代の「御義口伝講義」と拝しており、その玉稿を完全に否定するのが「教学要綱」と「要文」です。

4. 池田先生の「**法華經の智慧**」に違背の創大名誉教授、宮田幸一、菅野博史、中野毅、3氏の論考への破折。

池田先生が創立された創価大学の名誉教授三人、宮田幸一、菅野博史、中野毅の三氏は、**日蓮大聖人が久遠元初の自受用身如来**であることを否定、釈迦本仏論（**釈尊が永遠の仏で、日蓮は釈迦の使いである菩薩**）を主張しています。

私見、三氏は東大のロンドン仏教的な、訓詁注解、文献至上主義の釈迦本仏論を展開していて、結果的に宗教の持つ本来の存在意義である生命の感応、生命論を、人間の僅かな知見、歴史、書物だけから解釈、法華經の文上解釈にとどまり、日蓮仏法の本義を否定していると思います。そして、結論として、その思考は、キリスト教、イスラム教の神の存在論まで否定するのと同じ、宗教否定に至る、人間の知性を偏重した傲慢さの表われであると思います。

上記について、宮田、菅野、中野の三氏の順に、破邪顕正します。

最初に宮田氏の論述です。宮田氏の論述は、須田氏の著書「**日蓮本仏論の考察 - 宮田論文への疑問**」に引用された下記論述を読んでおり、そこからの引用です。まさに、現実を否定し御本尊を否定した頭破七分の論述三つです。

(1)日本国内においては、日蓮正宗は700年の歴史があり、日蓮本仏論を主張してもカルト団体とは社会的に認定されないが、**世界の仏教全体の中で、釈尊以外の歴史上の人物を釈尊より上位の仏として主張することは、他の仏教宗派から、さらには諸外国の仏教諸派が加盟する仏教協会からは仏教的主張とは見なされず、そのことが社会的にSGIを非仏教団体と認定する根拠となるだろう。一と。**(SGI 各国のHPの教義紹介の差異について)

(2)私は日蓮の曼荼羅に書かれた**禍福の讃文**（「有供養者福過十号」と「若悩乱者頭破七分」）の予言は宗教社会学的には真理とは言えないと思っている。（中略）その意味で私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からはその記述を除外すべきだと思っている。一と。（同上）

(3)仏教はもともと多言語主義だから、曼荼羅が聖別を必要としないのであれば、救済の普遍性のメッセージを伝達することができればよいのだから、**曼荼羅も漢字で書かれる必要性はなくなるだろう。日蓮は方便品、寿量品の読誦を必要な修行と認めたが、それも何も漢字の經典を、日本語化した中国語式発音で読誦する必要もないだろう。一と。**(『本尊問答抄』について) 26/75

(上記、宮田氏の論考に対する破邪顕正)

私見、宮田氏の(1)「非仏教団体と認定」に対しては、釈迦本尊の仏教国タイの国で、現在、数十万の人々が日蓮仏法を实践され認定などはない現実、また、世界広布の模範といえるイタリア SGI の草創期において、**多くの青年が「南無妙法蓮華經」の唱題により功德を得て、妙法の偉大さを実感していった歴史的事実**を以て反論します。世界広布最前線では、先ず唱題の歓喜があり、その後に教学の確信なのだと拝察しています。

(2)については、宮田氏が、日蓮の曼荼羅本尊の相貌にある「有供養者福過十号」と「若悩乱者頭破七分」の文字は削除した方がよいと発言していることは、大聖人様が「**今の法華經の文字は皆、生身の仏なり**」(法蓮抄 1426 頁)、また「**仏陀は、三十成道より八十御入滅にいたるまで五十年が間、一代の聖教を説き給えり。一字一句、皆真言なり。一文一偈、妄語にあらず。**」(開目抄 53 頁)と、法華經の全てが真実であり意義があるとの御文に違背します。一この御聖訓に反する大悪人であると断言します。ゆえに、大悪は断固粉碎しなければなりません。

(3)については、宮田氏の論述—曼荼羅も漢字で書かれる必要性はなくなるだろう。また、一日蓮は方便品、寿量品の読誦を必要な修行と認めたが、何も漢字の經典を、日本語化した中国語式発音で読誦する必要もないだろう。—の論考は論外であり、大聖人様と三代会長への違背、暴言と断じます。

特に(1)の暴言について、私の友人である中村誠氏も、次のように明確に破折しています。

一宮田教授は、「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」と書かれた大聖人の曼荼羅を否定し、「私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からはその記述(「有供 養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文)を除外すべきだと思っている」と主張し、日蓮大聖人その人を否定する暴論を吐いて須田氏に批判されている(『創価学会教学要綱』と 日蓮本仏論の考察」p.158)。

この「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」については聖人知三世事に「**輕毀する人は頭七分に破れ、信ずる者は福を安明に積まん**」と説かれている。その後「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」とあることから、**ご自身が釈迦を超える仏であるという認識が大聖人にあった証拠**になる。

また聖人という言葉は本来「仏」を意味する。開目抄には「仏世尊は実語の人なり。故に聖人・大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは、実語につけたる名なるべし」とある通りである。そして法蓮抄でも「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文を述べられた後、「当に知るべし、この国に大聖人有りと」と自ら大聖人と名乗られている。大聖人という言葉は全ての仏を超越した仏という意味であるから、**日蓮大聖人を釈迦の使いとする『教学要綱』の主張は日蓮を悪しく敬う邪義そのもの**となろう。

池田先生は「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文が説かれた国府尼御前御書に関して次のように述べられている。「日蓮大聖人を賛嘆する功德のほうか、釈尊を長い、長い間、賛嘆する功德よりも大きいというのです。実はここに法華經の秘密があります(略) 御本仏の出現と御本尊の出現を予告し、証明するために法華經は説かれたのです。法華經 二十八品という”月”の後に、末法には南無妙法蓮華經の”太陽”が昇る。そのことを、法華經自体が予告しているのです」一と。(『永遠の經典「御書」に学ぶ』第2巻 p. 46-47)。

ここでも**池田先生は、この御書を通して、日蓮勝(太陽の仏法)・釈尊劣(月の仏法)の思想を明確に説かれている**。そして更に「大聖人は自ら末法の御本仏であると示されたことは、ほとんどありません。それを言うと、だれも信じられず、不信を起こしたり、誹謗したり、退転するかもしれないからです」(同書 p. 47-48)と述べられている。

同様の主張は池田先生のスピーチにもみられる。「妙楽大師の言葉は、御本尊の左右の肩にも御認めである(略) 大聖人は、御本仏であられるが、当時の人々の目には、凡夫僧としか映っていない。ゆえに、人々を納得させ、救うために、經釈を引いておられる。”私が勝手に言うのではありませんよ。釈尊もこう言われている。妙楽大師も、伝教大師も、こう言われているではないか(法華經の行者を供養する功德も、誹謗する罰も釈尊をそうするよりも百千万億倍勝る)と。”(池田大作全集 85 巻, 「草の根」闘争から勝利の歴史が, p. 167) 一と。

上記で判明した通り、**宮田氏の論述は 日蓮大聖人と御本尊を根本的に否定した暴論であり、結論、そのような人が書いた「教学要綱」を、池田先生が監修されたとすることは、絶対にありえないのです**。それなのに、池田先生が監修として発刊したこと自体が、純真な学会員さんへの裏切りであるといえようがありません。



次に、菅野氏については2021年、日蓮大聖人ご生誕800年慶事に際し、東洋哲学研究所が編集した『日蓮の心』に掲載の論文「日蓮思想の根拠—法華経」の中に下記論述三つがあり、日蓮本仏を否定、釈迦本仏の邪義です。

(1) 日蓮は『法華経』に出る「仏滅後」を、自分の生きる末法時代と主体的に捉え、自身を六万恒河沙の地涌の菩薩の指導的立場である上行菩薩と考え、末法の衆生を救済する『法華経』の新しい修行法を確立すると自己認識したのであった。日蓮のあらゆる行動が、この釈尊から『法華経』の弘通を託された地涌の菩薩の使命感に裏付けられていることに気づかされる。(「日蓮の心」61頁)

(2) 仏に特別に選ばれ、仕事を託されたとする意識は、一般に使徒意識と呼ばれるが、この使徒意識が苦難に満ちた現実社会での『法華経』の弘通に基づく衆生救済の活動を支える根拠になるのである。勸持品における使徒意識に基づく忍耐の強調は、それをよく示している。日蓮の思想・行動に見られる現実社会の重視は『法華経』の現実世界の重視の思想に影響を受け、また、法華経の行者、地涌の菩薩としての使徒意識、つまり娑婆世界における『法華経』の弘通による衆生救済を根拠とするものであったといえよう。(同68頁)

(3) 「観心本尊抄」における仏界の説明にも「無始の古仏」といって、久遠実成の釈尊にちなんだ名称を用いている。日蓮においても、大乘の『涅槃経』の思想との関連で「仏性」という用語もしばしば用いるが、「無始の古仏」という表現には、日蓮の久遠の釈尊に対する信仰を見出すことができると考える。(同72頁)

(4) 日蓮自身が『法華経』を頭だけで読むのではなく、『法華経』を色読・身読したと自負したように、また「法華経の行者」の自覚を宣言したように、インドにおいて『法華経』が編纂された時点における『法華経』の中心思想を十分に受けとめ、歴史的に展開したのは日蓮その人だったのではないであろうか。(同74頁)

上記、菅野氏の論述、特に—日蓮の久遠の釈尊に対する信仰—とは、まさに身延派の釈迦本仏論です。

私は、東洋哲学研究所がこんな邪義の論述を、日蓮大聖人聖誕八百年の慶事として発刊した『日蓮の心』に掲載するとは驚愕の極みです。池田先生が創立された東洋哲学研究所に対し、非常に落胆しています。

また、菅野氏は2001年に発刊した自身の著書「法華経入門」の165頁において、小題—永遠の生命をもつ釈尊—として、下記論述しています。

一 釈尊は如来寿量品において、自分が成仏したのは今世ではなく、五百塵点劫というはるか遠い過去においてであることを明かし、あわせて未来の寿命は成仏してから現在（釈尊が「法華経」を説いている時）までの時間の二倍であると説く。つまり、釈尊の仏としての寿命の永遠性を説き示すのである。如来寿量品のポイントは、第一に釈尊の寿命が永遠であること、第二に釈尊が涅槃に入るのは方便（巧みな手段）であること、第三に信仰のあるものは釈尊を見ることができるということである。一と。

私は、菅野氏の上記論考、特に「釈尊の仏としての寿命の永遠性」については、寿量品の文上解釈に終わっていて、結論、なぜ、菅野氏は2000年に、池田先生が「法華経の智慧」においてご教示された釈尊の寿命の解釈に、随われなかったのか？不思議でなりません。その姿勢は、「法華経の智慧」の鼎談者である須田晴夫氏が池田先生のご教示を正確に理解し、その後、須田氏自身の著作「改訂版 新法華経論」でさらに明確な解説をしたのと比べ、池田先生のご指導を拝受する姿勢があるのかと思わざるをえないです。正と邪です。

さらに、菅野氏は2012年に「増補新装版 法華経 永遠の菩薩道」を出版していますが、その223, 224頁でも、2001年の「法華経入門」の寿量品解釈を超える内容になっていません。私は、菅野氏が創価大学の創立者である池田先生の「法華経の智慧」のように、法華経の文底からの解釈を通して日蓮大聖人の南無妙法蓮華経が釈尊の成仏の本因であったとする解説をして欲しかったです。

二〇二四年十月、聖教新聞電子版などで創価学会男子部教学室による「『教学要綱』は創価ルネサンスの集大成」と題する論考が発表され、それに対し、須田晴夫氏は一男子部教学室の「論考」に答える一との論文の中で、以下、記しています。私はそれを読み、菅野氏の論述の浅さの本質を知りました。

一 筆者が会長宛て書簡で「『教学要綱』を作成した中心は創価大学名誉教授の宮田・菅野両氏であると聞いております」と述べたのは、決して「曖昧な伝聞情報」によるものではない。実際に『教学要綱』の作成に関与してきた関係者から筆者が直接聞いた「証言」によるものである。宮田・菅野両氏の論文に当たって見ると釈迦本仏を説く両氏の論調は『教学要綱』の内容とほとんど合致している。この事実も両氏が『教学要綱』の作成に深く関与していたことを裏づけるものと思われる。一と。

私は、須田氏の上記を読んで、なるほどと思いました。宮田・菅野両氏が「教学要綱」の作成に携わっていたのなら、菅野氏の著作も宮田氏と同じく、釈迦本仏論であることは間違いないと理解したのです。実際、先月、宮田氏が、昨年3月に自身のフェイスブックで、「教学要綱」を作成したと明記した事実も知りました。

最後に、中野毅氏について破折します。中野氏は1月16日、自身のブログ<https://tnakano1947.asablo.jp/blog/2024/01/16/9651356?fbclid=IwAR03AAnFvB-ocgFZwNxGKCWsJP7HyZrE4CQ77FTQb7biG8XKw06EqqUJv0I> で、「教学要綱」について下記の論述があり、私はこのブログを読んだ直後に思ったことは、中野氏の以下三つの言質は全くの我見、勝手気ままな放言であると思いました。これらを紹介し、破折します。

1.（「教学要綱」が←図斉記）仏教の歴史を、インドで誕生した釈迦から始まるとした点である（第1章）。従来の日蓮正宗の教学、特に日寛教学では、久遠元初自受用報身如来の再誕が日蓮という意義付けで日蓮がインドの釈迦の遥か以前に存在する本仏であり、釈迦を迹仏とみなすなど、歴史学的には全く根拠のない論理で、日蓮から仏教は始まると主張していた。そのような奇想天外な論理をよく構築したと感心するし、そのインパクトが大きかったことも事実である。しかし、学术界や海外においては受け入れがたい主張であった。一と。

（破折）中野氏が—そのような奇想天外な論理をよく構築したと感心する—と放言、暴言した内容こそ、池田先生は「御義口伝」で、何千、何万回と、大聖人の本地は久遠元初自受用報身如来であると、私達にご教示されているのです。よって、中野氏の思いは池田先生のご教示と、全く違背しています。また、私は「奇想天外な論理」に大変な違和感を抱きます。そして、この言質は、池田先生の「法華経の智慧」の論述に対しても真っ向から投げつけた暴言であり、結論、これは師匠池田先生への冒瀆であると思っています。三代会長のどなたも納得されません。

また、私は、中野氏の考えは、仏教本来の捉え方ではないと破折します。私のその根拠は、須田晴夫氏の著書『『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察』105頁の以下論考「**時間の円環論**」に依ります。

一 釈迦を日蓮の上位者に置いている所以は、やはり仏教は釈迦から始まるという歴史的事実に囚われたからであろう。歴史的に見れば仏教は釈迦一人から始まるのであり、釈迦がいなければ仏教そのものが成立しない。その歴史的事実に拠る限り、仏教の本源は釈迦以外にはなく、途中から現れた日蓮などが釈迦を超越する根源となりうるわけがないという観念が生ずる。

しかし、そのような時間観念は眼前の歴史に囚われたものでしかない。仏教によれば宇宙も含めた万物は生成と消滅すなわち成住壊空を繰り返すものであり、**時間は円環的なものであるから、実は前も後ろもない。前後の区別などはなく、万物が無始無終の存在なのである。**

インドに生まれた歴史上の釈迦は、内証の境地においては根源の妙法を覚知していたとしても、妙法そのものを明示して人々に説くことはなかった。法華經寿量品によれば、五百塵点劫成道の釈迦仏も妙法によって仏にさせてもらった所生の仏、本果の仏であり、**寿量品の文底に暗示された南無妙法蓮華經こそが諸仏を仏ならしめた能生の本因である。**

南無妙法蓮華經を初めて万人に教示した日蓮をもって、本来、南無妙法蓮華經を所持する本因の仏であると捉えるならば、本因妙の教主である**日蓮を所生の存在である釈迦を超越する根源仏と位置づけることはむしろ当然の道理**となる。人と法は相即したものであり、人の位置づけはその人が説く法(思想)の高低浅深によって決まるからである。一と。

また、須田氏の別の著作「**新版 生命変革の哲学—日蓮仏教の可能性**」の253頁には次のようにあります。

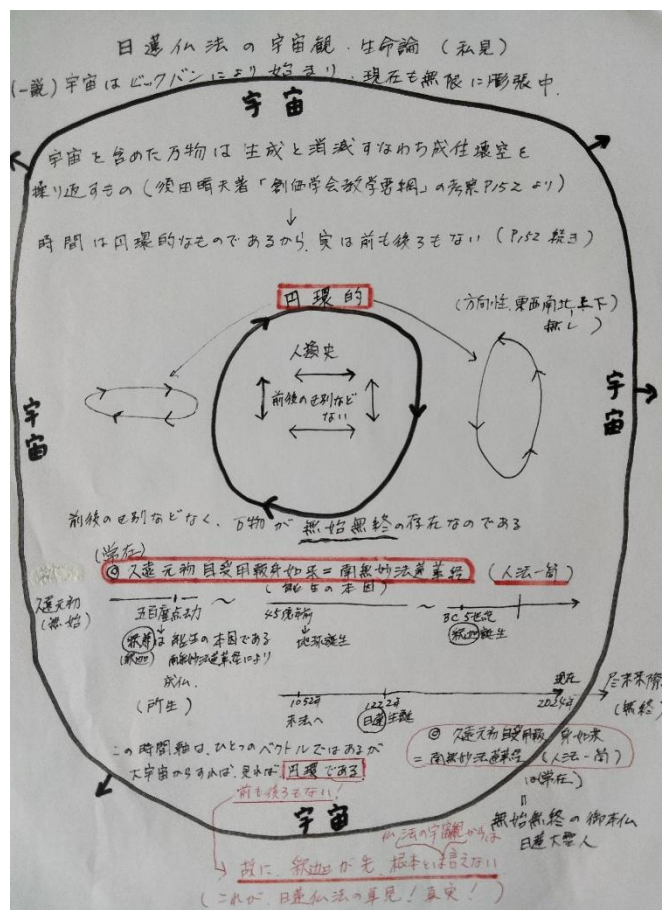
— 仏教は、「成住壊空」の言葉が示すように、宇宙を含めて万物は生成と消滅の循環を永遠に繰り返すものと見る。(ただし、その消滅は完全な無ではなく「空」であり、再び生成する力を潜在的に孕んだ状態である。)時間の流れは不可逆だが、**円環的**であり、始まりも終わりもない(無始無終)。万物は他者によって造られたものでなく、自ら生起し、また空に帰していくものとする。この**円環的な時間の観念**は仏教だけが主張するものではなく、バラモン教の学派じだいには既に一般的な見解となっており、ギリシャなど世界的に広く見られる思想である。一と。

私見:この須田氏の論考は素晴らしいです。中野氏の言質 一日寛教学では、久遠元初自受用報身如来の再誕が日蓮という意義付け(中略) そのような奇想天外な論理をよく構築したと感心する 一に対して、須田氏の論考こそ、仏教の甚深な考察であると拝します。また、次の**池田先生のご指導**もご参考下さい。

池田先生とルネ・ユイグ氏の対談「闇は暁を求めて」で、先生は一合理主義の狂気性 **円環的**—と題して、以下述べられています。

—あなた(ルネ・ユイグ氏)は「西洋人は結果をうることに食欲で、その結果をうるための原因を探究するが、それによって生ずる結果の複雑さを考えようとしない」と指摘されていますが、その傾向性は個々の事物の **因果を閉鎖系として完結させてしまう**ところに原因があるのではないのでしょうか。

仏教は全体的な相関性のうえから空間的には**一種の円環的な因果の連続**をみ、時間的には**無限につづくサイクルとして因果をとらえています**。前者は基本的には縁起と呼ばれる考え方であり、後者は、輪廻と呼ばれる考え方です。



前者は仏教の初期の經典において「此れあるときに彼あり、此れ生ずるときに彼生ず、此れなきときに彼なく、此れ滅することにより彼滅す」と、簡潔にその思想が説かれています。のちに依正不二論、一念三千論等の原理として完成されています。

後者の考え方は、のちに生住異滅の四相、成住壊空の四劫などの原理として展開されます。簡単にいえば、すべてのものは発生と成長、安定、崩壊、消滅のサイクルを永遠に繰り返すというものです。私はこうした全体的・総合的な因果の視点が、今日ほど要請されているときはないと痛感しています。—と。

上の図は、私の**円環**についてのイメージですが、「**久遠元初の自受用身如来＝日蓮大聖人**」の、私なりの確信です。仏教の奥義を知らない、信じられないのが中野氏なのだと思います。ご参考下さいませ。 33/75

2. 日蓮が顕した本尊と、それを書写した本尊をすべて「本門の本尊」として拝するとした。なお、創価学会員が信仰の対象とするのは、創価学会が受持の対象として認定した本尊に限るとした(「**教学要綱**」82 頁)。宗教学的には、**曼荼羅本尊を『象徴』として捉えたのであり、従来の本尊論からの脱呪物化(物体を特殊な超越的力をもったものと捉える発想からの脱皮)と言える。**一と。

(破折) 私は、こちらにもまず初めに、中野氏のこの文、特に「呪物」との言葉は、真面目に信心をされる多くの学会員にとって非常におどろおどろしい、不愉快な表現に違いないと思いました。従来の本尊論からの脱呪物化とは、一体、何でしょう？もちろん、中野氏は曼荼羅本尊を「呪物」と言っているわけではなく、「象徴」とする立場であると思います。しかし、従来の本尊論がまるで「呪物」であるかのような言い回しは、命がけで唱題している多くの学会員に対して非礼としか思えません。中野氏は、呪物化とは(物体を特殊な超越的力をもったものとして捉える発想)と、わざわざ説明していますが、結論、学会員のだれが、御本尊を特殊な超能力を持ったものとして捉えているのでしょうか？その発想自体が奇異であり、勝手ながら、中野氏の心象風景に、ある種の荒涼さを感じます。

また、中野氏は、学会員が受持したご本尊は、「**宗教学的には、曼荼羅本尊を『象徴』として捉えた**」と記されておりますが、このことにつき、私は本尊を単なる『象徴』とすると、結論、我々衆生の信力・行力に応じて本尊に仏力・法力が現れることを否定するので、御本尊を『象徴』という言葉で放言すること自体、全く、浅薄、不遜なことであると思います。**大聖人の御本尊は大宇宙を円融に司る本源的生命力の当体であり、即、大聖人のご生命、大慈悲そのもの、更には、私たち一人一人の生命であり、結論「仏界」そのものなのです。**

日女御前御返事で次のように記されています。―「**此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王真如の都とは申すなり、十界具足とは十界一界もかけず一界にあるなり、之に依つて曼陀羅とは申すなり、曼陀羅と云うは天竺の名なり此には輪円具足とも功德聚とも名くるなり、此の御本尊も只信心の二字にをさまれり以信得入とは是なり。日蓮が弟子檀那等・正直捨方便・不受余經一偈と無二に信ずる故によつて・此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり・たのもし・たのもし、如何にも後生をたしなみ給ふべし・たしなみ給ふべし、穴賢・南無妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり、信心の厚薄によるべきなり仏法の根本は信を以て源とす、されば止観の四に云く「仏法は海の如し唯信のみ能く入る」** 一と。

この大聖人の御文を拝する時、中野氏の考えは、大聖人のお心を理解できない下劣なる我見でしかないと断定します。私は中野氏にお会いしたことはありませんが、中野氏に対し創価の同志は全く信頼しないでしょう。また、創価大学名誉教授としての尊敬もしないでしょう。

3. 釈迦も後世に、次第に超人的な存在にされていったが、本来、歴史上の釈迦は他の人々と変わらぬ一人の人間であり、異なるのは、修行の結果として得た真理への洞察と慈悲が卓越していたことにあった(「**教学要綱**」117 頁)。釈迦をあくまで人間として捉えているのと同様に、**日蓮も久遠元初仏の再誕とか、上行菩薩の再誕などと神秘化せず**、『法華経』の肝心を「南無妙法蓮華経」という根本法として提示し、万人が修行して覚知できるよう、三大秘法を表した「末法の教主」として「末法の本仏」としたことは説得力に富むと言える。一と。

(破折) 中野氏のこの邪義についての破折は、本質的に①の内容と同じです。本拙文の P 6 - p 7 に掲載の戸田先生の寿量品講義の以下の文に尽きます。

— **大聖人は、久遠元初の自受用報身如来**であります。それが第一番には五百塵点劫の釈尊と現れ、あらゆるところに久遠元初の自受用報身如来の慈悲を垂れられ、衆生を見られて、特にこの末法へ大聖人がお現われになった。—

この戸田先生のご指導は日蓮仏法の根本であり、池田先生も「**法華経の智慧**」そして、「方便品・寿量品講義」において、時代に即応されて講義されましたのに、このご指導を中野氏は知らないのでしょうか。また、中野氏は「**日蓮も久遠元初仏の再誕とか、上行菩薩の再誕などと神秘化せず**」と、**戸田先生、池田先生**はもちろん、創価学会の誰も言わない解釈を表明しました。

一体、中野氏は、この表明を、何の目的の為にされたのでしょうか、または、どなたかにお願いされて発信されたのでしょうか、私は、中野氏の真意がわかりません。そして、上記の文は、日蓮大聖人を「神秘化せず」とまで、勝手な放言をしているのです。私は、これまた、一体、どこの誰が大聖人を「神秘化」していますか。**神秘化しているのは中野氏、あなた自身ではないですか！**と反論いたします。そして、更に、中野氏は日蓮大聖人を「久遠元初仏」から時代的な限定をして、「末法の本仏」と矮小化し、それが「説得力に富むと言える」とまで放言をしています。これは、三代会長のご指導と完全に違背しています。以上、中野氏への破折を終わります。

私は、上記のように、宮田幸一、菅野博史、中野毅の三氏が、池田先生の創立された創価大学の名誉教授であることに、卒業生として残念でなりません。

私の友人から下記の論述が寄せられました。その通りだと思い引用します。
— 教学要綱のアドバイザーとされる宮田幸一氏や、彼と教学要綱を支持する中野毅氏は、「学問的研究」を標榜するものの、真蹟のない御書を確認もなく排除します。それは科学的実証主義に反しており、学問的態度ではありません。知的誠実さを欠く浅薄で偏った結論ありきの態度に過ぎず、学問を装う欺瞞行為です。低レベルの人物が教学研究の場において影響力を持てば、愚劣を極めます。

歴史的文献においては、真蹟の有無だけで価値を断定することは早計であり、歴史的継承がもつ信用や文献の思想的意義を考慮する必要があります。たとえば、源氏物語の著者が紫式部との証拠はないけれども、信頼ある伝承です。竹取物語は作者すら不明ですが、文学的価値は極めて高く評価されています。そもそも、古文書を研究する文献学に、厳密な科学的実証主義を適用するのは極めて困難で、ほとんど不可能です。そういう学問分野なのです。

宮田氏や中野氏は、即刻その独善的かつ反科学的な態度を改めるべきです。また、彼らを支持する者たちには、彼らの思考法の欠陥を冷静に見抜き、教学の本質を守るために行動することが求められます。創価学会の未来を考えるならば、似非学者の似非学問に振り回される余地は一切ありません。—と。正論です。

また、違う方から以下の論述を頂きました。

—中野氏など『**教学要綱**』擁護派には曼荼羅本尊を呪物・オカルトとする態度が顕著に見られますが、それは草木成仏を神秘主義として否定する宮田氏の態度と同じです。浅薄な合理主義を出ることができず、草木に十界の働きがあるという一念三千の法理が理解できないのです。

『折伏教典』などにも書かれてありますが、文字が書かれた紙は大きな力を持ちます。外交文書や借金の保証書、紙幣を考えただけでも、個人の人生はおろか国家の運命をも左右するほどの力があることは明確です。もちろん曼荼羅本尊それ自体が力用を持つものではありません。「信心の本尊」ですから、日寛上人が教示された通り、信力・行力に応じて仏力・法力が現れるのです。

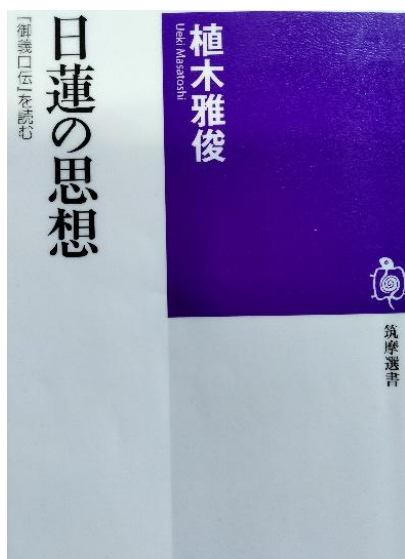
『**教学要綱**』発行の狙いは、日蓮正宗からの独立を教義面でも実現し、教義的にも創価学会の独自性を確立することであつたと思います。2014 年の会則改定が一つの契機であつたと思っております。それ以降、日蓮正宗を否定する余り、創価学会の基盤である日興門流の教義まで否定する方向に向かつていった訳です。その結果、身延派まがいの『**教学要綱**』となつたと理解しております。

教団と教義の次元が異なるものであることを認識せず、一緒くたにして否定する誤りを犯したと思います。日蓮・日興から始まる日蓮仏法の正統教義は全人類のために残された普遍的なものであり、決して日蓮正宗などの一教団などに縛られたものではありません。創価学会がその普遍的教義を継承している教団であることを理解せず、その破壊を企てたのが『**教学要綱**』です。

創価学会の持つ深い宗教性が分からず（自分たち自身に信仰心が皆無であるため）、学問的に批判されずに評価されたいというアカデミズム業界人としての虚栄心を満たそうとしたのが宮田・菅野の両氏です（宮田氏などは研究者としても社会的には全く評価されていません。）一と。その通りと拝します。

以上、宮田幸一、菅野博史、中野毅、三氏への破折です。

5. 日蓮大聖人の「**一念三千の法門は、ただ法華経の本門寿量品の文の底にしずめたり**」との文底解釈に違背する植木雅俊著「**日蓮の思想 御義口伝を読む**」他への破折。



「**御義口伝**」は日蓮大聖人が法華経を文底から解釈された日蓮仏教の奥義で、その基調は日蓮本仏論です。それに対して、植木雅俊氏が記す「御義口伝」の解説は浅薄な文上解釈の**釈迦本仏論に過ぎません！**

開目抄（新版 54 頁）には「**一念三千の法門は、ただ法華経の本門寿量品の文の底にしずめたり**」とあります。この御文は、一念三千、即ち**南無妙法蓮華経は寿量品の文底にあるとの意味**です。これは法華経の肝要である寿量品を、日蓮仏教では、文底から拝しなさいとの大聖人のお言葉であり、法華経解釈の原則です。

そして、文底から法華經全体について講義されたのが「御義口伝」なのです。「御義口伝」を拝する時、この原則を逸脱した読み方は、最初からこの御文により退けられます。

「南無妙法蓮華經 御義口伝に曰く、南無とは梵語なり。此には帰命と云う。人・法之有り。人とは釈尊に帰命し奉るなり。法とは法華經に帰命し奉るなり」について、池田先生の「御義口伝講義上」（５２頁）には次のようにあります。

一「『人』とは、文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人である。『法』とは末法の法華經であり、法本尊であるところの南無妙法蓮華經である」と記されており、末法において始めて南無妙法蓮華經と唱え、それを曼荼羅に顕わされたのが日蓮大聖人であり、法は南無妙法蓮華經である一と。

この文底からの解釈が大聖人の本意なのです。それに対し、植木氏の解釈は終始一貫、これを無視、釈迦を本仏として大聖人を文上の法華經の行者としてしか扱っていません。これでは、日蓮の思想も「御義口伝」を読むこともできません。

本書を読んだ直後、池田先生の「法華經の智慧」の鼎談者である須田晴夫氏の「新版 生命変革の哲学—日蓮仏教の可能性」を読みました。その第三章、第四節「日蓮の位置づけ」—には、以下のように記されています

一「日蓮が『本尊問答抄』で『釈迦・大日、総じて十方の諸仏は、法華經より出生し給えり。故に今、能生（のうしょう）をもって本尊とするなり』（新版御書 p 304 頁）と明言した通り、釈迦仏は根源の法である南無妙法蓮華經によって生み出された『所生（しよしょう）』の存在であり、南無妙法蓮華經が一切の仏を生み出した『能生』の法体である。それ故に日蓮は釈迦仏像を本尊とせず、南無妙法蓮華經を顕した文字曼荼羅を本尊としたのである。日蓮こそが南無妙法蓮華經を初めて弘通した教主である。（中略）

日蓮が『今、末法に入りぬれば、余經も法華經も詮(せん)なし、ただ南無妙法蓮華經なるべし』（新版「上野殿御返事」1874 頁）、『今、末法に入りぬ。人ごとに重病有り。阿弥陀・大日・釈迦等の輕藥にては治し難し』（「妙蜜上人ご消息」1708 頁）（中略）「日蓮は自身を指して『教主釈尊よりも大事なる行者』（「下山ご消息」299 頁）と述べている」—とあります。ここに、**日蓮本仏論は明確**です。

私は、これまで、植木氏の著作のほとんどを読み、以下、3つの大きな誤りを発見しました。

①植木氏は「法華經の後半に追加された六つの章は『法華經』本来の思想を歪めるものであって、筆者としてはないほうがよかったのではないかと思う（「法華經とは何か」33頁）、また、「如来寿量品（第十六）は三世十方の諸仏・菩薩を釈尊に統一する意図をもって編纂されていたが、最終の六つの章は寿量品成立後に作られているので、寿量品の主張をなし崩しにするところが多々見られる。この普賢菩薩勸発品（第28品）もその例にもれない」（同253頁）一と。これは法華經を批判する暴言です。

これらの放言は、釈迦が法華經を説くにあたり「真実を説く」と宣言し、多宝如来が「法華經は真実である」と証言、また、十方の諸仏が「法華經は間違いない」と言明したことに反した法華經への誹謗です。觀世音菩薩や陀羅尼信仰などを法華經の中に取り入れた法華經制作者の意図などを植木氏が汲み取っていないと言えます。また、日蓮大聖人が「今の法華經の文字は皆、生身の仏なり。（法蓮抄1426頁）、また「仏陀は、三十成道より八十御入滅にいたるまで五十年が間、一代の聖教を説き給えり。一字一句、皆真言なり。一文一偈、妄語にあらず。」（開目抄53頁）と、法華經の全てが真実であり意義があるとの御文に違背します。

②植木氏は「十如是」についての問答で「鳩摩羅什訳には十如是有りますが、これはサンスクリット原典にはありません。」（中略）「ケルン・南条本では、一それらの諸々の法は何であるか、どのようにあるのか、どのようなものであるのか、どのような特徴を持つのか、どのような固有の性質を持つのか—というように、疑問符が五つ並んでいるだけです。」（中略）「鳩摩羅什が勝手に創作して、五つだったものを十にした可能性が高い」（「ほんとうの法華經」111頁）一と記しています。この言質は酷いです。「鳩摩羅什が勝手に創作」とは！

しかし、大聖人は「『本と末とは究竟して等し』とは説き給えるなり、これを『如是本末究竟等』とは申したるなり。始めの三如是を本とし終わりの七如是を末として十の如是にてあるは、我が身の中の三諦にてあるなり。」（十如是355頁）、「十如是というは、妙法蓮華經にてありけり」（一念三千法門362頁）と仰せです。鳩摩羅什が法華經制作者の真意を拝し「十如是」を明確にしたからこそ天台の理の一念三千が成立し、それを継承された日蓮大聖人が事の一念三千の当体である御本尊を顕現することができたのです。サンスクリット本が鳩摩羅什の漢訳よりも法華經の原形に近いと考えている植木氏の偏見は問題とされるべきです。

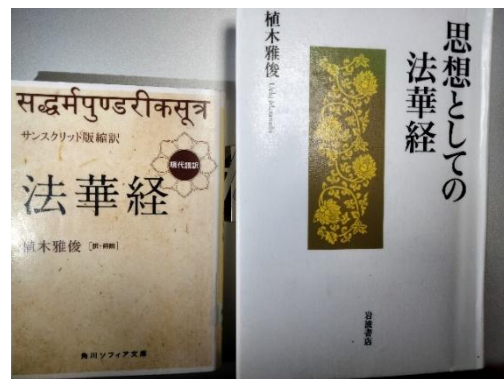
③本書には植木氏の邪義がたくさんありますが、看過できないのは「輪廻と業（カルマ）は仏教の思想だと思っている人が多いが、そうではない。」（203頁）、また「天台大師の解釈は、もともと『法華経の』意図していなかったことを他の経典から枠組みを持ち込んで無理矢理、型にはめるもので、『法華経』を誤解させるものでしかない。」（234頁）です。

結論、植木氏には法華経や天台大師、日蓮大聖人に対する敬意（リスペクト）がなく、法華経や天台、大聖人よりも自分の方を高みに置き、自分の見解を絶対視する傲慢さがあります。こんな暴論の持ち主に、日蓮仏法の極説たる「御義口伝」を読み、我説を述べる資格はありません。したがって、植木氏のこの本は、浅薄なる釈迦本仏論から曲解された「御義口伝」への我見の解釈であり、日蓮の思想とは到底言えません！

さらに、植木氏のサンスクリット本からの法華経論について、私見を述べます。



（サンスクリット語法華経の現代語訳）



（サンスクリット版縮訳と、法華経の思想論）

＊縮約には詳細な解説も章ごとに収録

植木氏の「**サンスクリット語法華経の現代語訳 上下**」は、2008年に発刊され、その8年前2000年には池田先生の「**法華経の智慧**」全六巻が既に発刊されています。「**法華経の智慧**」第六巻 p314に次のような対談があります。池田先生の鼎談者は斎藤教学部長と須田副教学部長です。

須田：そこまでで、法華経二十八品の実質の説法は終わるわけですね。

斎藤：その後、霊鷲山の大衆は、皆、大いに歓喜し、仏の言葉を抱きしめて、仏に礼をして去ります。これで、しめくくりとなります。この最後の一句が「作礼而去（礼を作して去りにき）」（法華経六七二ページ）です。

大聖人は、二十八品の最後の「去（こ）」の字は「死」を意味すると仰せです。そして、二十八品の最初の一字である（「如是我聞一是の如きを、我聞きき一の」「如」の字は「生」を表すと。

須田：「如」で始まり、「去る」で終わる。もちろん、これは鳩摩羅什が漢文に翻訳した時に、意識して、そうしたのだと思います。

齊藤：それは、何を表しているのか。「生死」の二法であるというのが、大聖人の仰せです。

名誉会長：素晴らしい翻訳だね。（寿量品の）自我偈も、「自」で始まり「身」で終わる。「自身」です。「終始自身なり」（御書七五九ページ）と大聖人は仰せだ。”自分自身“の生命が、三世永遠に仏として続くというのが、自我偈の本旨です。その元意を端的に表現している。二十八品全体でも、始めの一字と終わりの一字が「如」と「去」で、「生」と「死」を表している。

須田：羅什三蔵は天才ですね。

この対談から池田先生が羅什訳の法華経を称えられていることがわかります。また、「法華経の智慧」で池田先生と鼎談された須田晴夫氏は、その後 2015 年、鳩摩羅什の漢訳「妙法蓮華経」（406 年訳出）を現代日本語に訳し、各品ごとに解説を付けた「新 法華経論 現代語訳と各品解説」を発刊されました。須田氏はこの著作のはじめにで、次のように述べています。

一 羅什の訳文は宗教的感銘と生命力に満ちた達意のものになっている。「妙法蓮華経」がアジアにおいて、サンスクリット本からの逐語訳に近い「正法華経」（竺法護訳、286 年訳出）よりも広く用いられた所以は、羅什の確信のフィルターを通して訳出された「妙法蓮華経」の方が法華経の経意をより正確に示しているとは判断されたからであろう。一と。

さらに、池田先生は鳩摩羅什の『妙法蓮華経』について、著書「東洋の叡智を語る」で、次のように記されています。一日蓮大聖人は、鳩摩羅什訳の『法華経』こそが、釈尊の精神を正しく伝えた訳であると称え、次のように述べられています。―「インドから中国へ経・論等を翻訳し伝えた人は、百七十六人である。そのなかで鳩摩羅什ただ一人だけが、教主釈尊の経文に自分勝手な言葉をまじえない人である」（御書旧 1007 p、新 1382 通解）鳩摩羅什は、サンスクリットにも中国語にも精通していました。一と。すなわち、大聖人様も池田先生も、鳩摩羅什の訳した『法華経』を、最大限に称えられているのです。



最後に、「**ほんとうの法華経**」の論述の拙さを述べます。452～456頁で、法華経の最後の6品について一法華経と無関係に作られた観音品一に続く一庇（ひさし）を貸して母屋を取られる一との、下記、論述です。

（植木）観音品はもともと、観音経として独立していたものですから、法華経とは全く関係ない。「観音菩薩の名前を呼べば、こんなにいいことがあるよ」と強調しているだけです。

（橋爪）法華経はできたけど、オリジナルのバージョンのままでは今ひとつ民衆にアピールしない。とにかく盛り下がっている。ファミレスで言うと、従来からある定番のメニューみたいなもので、安定感はあるんだけど、お客さんの入りは思わしくない。

（植木）そこで、キッズメニューを作って子どもたちにアピールして、「お父さん、こんな美味しいそうなのがあるよ。今度連れってってよ！」と言わせる。

（橋爪）いままで大人向けのハンバーグばかりだったけど、年配の人向けに和食メニューを出したり、子ども向けにキッズランチを出したりする。**そういう感じでメニューを増やして、お客さんを増やそうとする戦略ですか。**

（植木）そんなところだと思います。

（橋爪）その戦略はうまくいきましたか。

（植木）庇（ひさし）を貸して、母屋を取られたかもしれませんね。

（橋爪）中国では、思いがけず、観音信仰が流行し、日本にも大きく影響していますね。

（植木）ええ。中国・日本では観音信仰が中心となり、法華経本体のほうは二の次になった感があります。敦煌で最もたくさん描かれている菩薩が観音であり、弥勒です。一と。

私は、この問答を読み唖然としました。何と稚拙な論述であろうかと。これは、法華経をまじめに研鑽しようとする方へのふざけであり、尊極の法華経への冒涇です。こんな対談者の二人に、法華経を語る資格は全くありません。なにより、**大聖人は法華経を実証し、再解釈し、命を吹き込んだ方であるとの認識が必要です。大聖人から新たな仏法、本当の真実の仏法がはじまっているのです。**

ですから、法華経の成立過程等がどうのこうの、というのは、大聖人の仏法の真実とは関係ないのです。植木氏が「**鳩摩羅什が十如是を勝手に創作した**」との放言、これでは天台大師の一念三千が成り立たない、つまり、大聖人の南無妙法蓮華経が成り立たないのです。よって、植木氏の日蓮観は整合性が破綻した自語相違です。氏の日蓮観は、天台の一念三千を用いて独自の仏法を確立された大聖人様の法理論に反しています。

＊ある方から下記の論考を頂きました。― 天台の一念三千は日蓮仏法を構築する基礎や足場ですね。大聖人は、一念三千を利用して真実である日蓮仏法を説明し、また、一念三千を再解釈されて、新たな命を吹き込まれているわけです。一念三千がなければ、御本尊をあのような姿で御図顕できないわけですから、一念三千は大切です。御本尊が出現しなければ、一念三千が何なのかはチンプンカンプンです。植木氏の言い草― 十如是は「鳩摩羅什が勝手に創作して、五つだったものを十にした可能性が高い」「キッズメニューを作って子どもたちにアピール」―などの暴言は、見当違いで的外れというべきものです。

全宇宙の森羅万象を総称して、法界の万法という言い方がありますが、様々に観察することができます。南無妙法蓮華経はそれらすべてを包含し、また万法は南無妙法蓮華経の姿であるというのが大聖人のご教示なのです。一念三千というのは、世界を分析したときに三千の範疇に分けたというもので、分け方によっては、簡潔に減らせうるし、あるいは、三千より多く増やせうるものですが、三千はよく的をいているというものなので、植木氏が難癖じみた言い方をしているのは甚だおかしいのです。鳩摩羅什は釈尊が説いた概念をより精緻にしたということもできます。そう言う言い方をしないことがおかしいです。

仏法というのは、正しく発展させることができるものです。歪めて展開させる者が過去の邪法の坊主たちです。結論、植木氏は、サンスクリットが読めるからって、うぬぼれているところがあるように見うけられます。サンスクリットの記録から、釈尊の思想を考えてゆくことも大切ですが、後年の哲人が、仏教をどのように深化させていったかを的確に洞察・把握することも大切です。―と。 正論です。

また、もう一方から下記の論考を頂きました。一日蓮大聖人の仏法哲理は、生命の不可思議とその宇宙大の可能性を説く、広大無辺、甚深無量の法門であるのです。法華経は、釈迦→鳩摩羅什→天台→伝教と仏法史的な流れの中で日蓮大聖人へと継承発展されたもので、日蓮大聖人そもそものお命であった妙法の説く大哲理をいきなり無知蒙昧の末法の衆生に説いたとしても、理解されないばかりか、愚かで非生産的な反論反駁に遭うばかりで、その反証に時間を費やすことで終わってしまうところを、できる限り、日蓮大聖人の具体性、末法の衆生を思う大慈大悲で、御本尊を御図顕されたこと、唱題・自行化他という一生成仏への具体的修行方法を衆生に明らかにしてお伝えくださったことにあります。

これこそ、成仏への直道を、天台の理の一念三千から大聖人の事の一念三千へと一挙に昇華したことに表れています。しかもその差は天地雲泥の差、太陽とその反射でしか光ることのできない月、その写り込みでしかない池の水面の月影ほどの違いがある分けです。つまり、日蓮仏法は、釈迦・天台を継承してはいても、単なるアレンジではない第三の法門なのです。

植木氏は、本質ではない十如是の「個数」や法華經成立過程に捉われて、鳩摩羅什訳の法華經自体が持つ価値を見損なっています。それにより、羅什のみならず、羅什訳をエビデンスに用いて教理を構築した天台、伝教、さらには大聖人のことまでも愚弄することになる大過を犯しているのです—と。こちらも正論です。

さらに、海外在住の別の方からも、下記頂きました。

一鳩摩羅什に「この經典を北東に伝えよ」と言った師匠の須利耶蘇摩が教えた諸法実相の「諸法」についての(注)として十如是を加筆したと聞いたことがあります。決して勝手に書いたものではありません。釈尊から大乘仏教その中心的經典としての法華經の編纂、鳩摩羅什による漢訳妙法蓮華經、更に天台の一念三千を経て末法に入って**日蓮大聖人の事の一念三千-南無妙法蓮華經へという「進化」の歴史は、ひとえに凡夫即極をご自身の生命に具現化された御本仏-日蓮大聖人のご出現のためにあったと捉えております。**インドに生まれた釈尊も大乘論師の龍樹天親も須利耶蘇摩も鳩摩羅什も天台も妙楽や伝教もそのための不思議な使命を持って生まれ使命を果たして来たのだと思います。在在諸仏土常与師俱生です。西から東に向かった釈尊の月の仏法が、末法に日蓮大聖人の太陽の仏法たる南無妙法蓮華經として創価学会とりわけ池田先生によって西還し世界に広がったという事実をもっても、釈尊の仏法とは雲泥の差があります —と。こちらも正論です。

池田先生は「**法華經の智慧**」第六卷 353~355 頁で下記記されています。

一大聖人は、佐渡に着いてすぐに「開目抄」の御執筆に着手される。そこでは大聖人がなぜ難に遭うのか、理由を明快に示されている。そのうえで、大聖人の大境涯が拝されるのは、理由を挙げられた直後の次のお言葉です。「**詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん**」(御書 232 頁)、(中略)日寛上人は「**一たびこの文を拝せば涙数々降る。後代の弟子ら、当に心腑に染むべきなり**」(文段集 205 頁)とされています。(中略)「**広宣流布**」という法華經の「魂」を生きる御自身のお立場を、鮮明に宣言されている。經文に照らして正当か否か、ではない。**反対に、法華經に正当性を与えている。**—いわば「法華經」の「魂」となるものを示してくださっているのです。それは、自分がどうなろうが何があろうが、民衆救済はやりとげるのだという「心」です。—と。

私見、上記、一**(大聖人は) 反対に、法華經に正当性を与えている**—こそが、**池田先生の法華經論の結論**であり、宮田幸一、菅野博史、中野毅、植木雅俊の各氏は、法華經のもとでの日蓮、つまり、**釈迦本仏論**なのです。それに対して、**池田先生は大聖人から法華經の位置づけをして下さったのです。**これこそが日蓮仏法の真髓です。

先生は「**法華經の智慧**」第六巻の最終、367頁で、一法華經を論じたと言ってもまだまだ浅いし、十分ではない。日蓮大聖人の仏法は限りなく深いものです。だから、これまでの研鑽をもとに、**将来、さらに完璧な法華經論を目指してもらいたい。妙法を広く宣流布している我々にしか、法華經の真髓は決してわからないからです。**一と、言われています。

私は、僭越ながら、池田先生のご遺言とも拝せるご期待を見事に記されたのが、「**法華經の智慧**」の鼎談者である須田晴夫氏の下記著作であると拝しています。



上記、須田晴夫氏の「**改訂版 新法華經論 現代語訳と各品解説**」こそが、「**法華經の智慧**」を補完、さらには、須田氏独自の法華經観、法華經解釈を記されていると思っています。

特に、次の頁で引用の最終章の箇所は、私がこれまで読んだ数十冊の法華經の本には全く記されていない法華經の真髓、即ち、私たちの生死、特に、臨終時における希望が、延いては、法華經の存在価値、使命を明確にされています。ご参考頂きたく思います。

そして、結論「**法華經の智慧**」の**日蓮本仏論**を完全否定したのが「**教学要綱**」であり、「**法華經の智慧**」での池田先生のご教示を、最も理解し、先生の御期待通り、法華經をさらに深く、私たちに解説されている須田晴夫氏に対して、**対話なき無視と、上位下達の「破和合僧の断定」**をしているのが現状なのです。そこには、池田先生のご指導を蔑ろにする心があるとしか考えられません。

4 法華經の行者の功德

さらに普賢品は、仏滅後の濁悪の時代に法華經を行する者の功德を強調する。

① 法華經を書写した者は臨終の後に忉利天に生まれ、天女の中で樂しみを得る。

② 法華經を受持・読誦し、その意味を理解したならば、臨終の時、千の仏が手を差し伸べ、兜率天の弥勒菩薩の所に行かせてくれる。

③ 法華經の行者は世間の快樂や衣服・飲食物などを貪り執着する心がなくなり、悪人に近づかなくなる。

④ 法華經の行者は心が正直になり、貪瞋癡の三毒や嫉妬や慢心に悩まされなくなる。

⑤ 法華經の行者は願いが成就し、現世において幸福の報いを得る。

⑥ 法華經の行者を輕蔑して誹謗した者は、現世あるいは未來世でさまざまな重病になる。

これは、法華經を行する人の功德を強調することで、仏滅後の末法における法華經の弘通を促す趣旨である。

ここでは弥勒菩薩への信仰も包摂していることが注目される。また、現世における諸願満足だけではなく、臨終における千仏の擁護を説くことで死の恐怖から免れる功德を説いていることも特徴的である(千仏の擁護を説くことは、阿弥陀仏一仏のみの來迎を説くにとどまる浄土教信仰と対抗し、それを克服する意図であろう)。法華經全体において臨終時の安心立命の功德を説くのはこの箇所のみである(不輕菩薩が臨終に臨んで六根清淨の功德を得たとされることはあるが)。死および死後の説明、死の恐怖の克服が全ての宗教の存在理由であるとするならば、法華經は最終章に至ってその課題に応えたいえよう。

臨終時の安心立命！

さらに、法華經の行者においては世間の快樂を貪る心がなくなり、貪瞋癡の三毒や嫉妬、慢心に悩まされなくなるとして、法華經を行ずる人の生命變革、境界革命を説いている。この点は法師功德品で行者の六根清淨を説くことも軌を一にしている。法華經は、来世は容姿端麗になり、天の宮殿に登ると説くなど(隨喜功德品)、通俗的ともいえる利益を説くことも少なくないが、法華經の功德の本意は実践する人の生命自体の變革にあることを教えているのである。

5 妙法弘通の促し

普賢品は、法華經の行者を尊敬・擁護することを強調して、法華經を受持する人を仏を敬うようにすべきであるとする。この点は法師品などにも共通して見られることであるが、行者が登場する時代を仏滅後の末法であるとするところが普賢品の特徴といえよう。

日蓮は、この品の「もしも」の經典を受持する者を見たならば、まさに仏を敬うように、立ち上がって遠くから迎えるべきである」の文を法華經の「最上第一の相伝」法華一部の要路

として重視した「御義口伝」七八一頁。すなわち、法華經のもつとも重要な心とは妙法を弘通する人を仏のように敬い大切にすることにあるというのである。ここにも普賢品の根本趣旨が滅後末法の弘通にあることが明らかに表れている。

このことは普賢菩薩の仏への誓い——「神通力をもつてこの經を守護し、如来の滅後に世界(閻浮提)の中に広く流布せしめ、断絶させないようにします」との誓い——にも明確に示されている。法華經が指し示す根源の妙法を永遠にわたって世界に流布し、全人類の幸福を実現していくこと、それが普賢品の、さらには法華經全体が目指した理想であつたのである。

法華經の智慧も更に、
深く解説された玉稿！
普賢品の深意を明示
された！

6. 「要文」の削除、改竄15箇所の主要部を、更に簡潔、明確化して揭示

(以下の引用、赤色、茶色、下線を施したのは私、図斉)

- ① 南無妙法蓮華經(「要文」12頁) 御義口伝に云わく、「南無」とは梵語なり。ここには「帰命」と云う。人法これ有り。人とは釈尊に帰命し奉るなり。法とは法華經に帰命し奉るなり。また云わく、「帰」と云うは迹門不變真如の理に帰するなり。「命」とは本門隨緣真如の智に命づくなり。「帰命」とは南無妙法蓮華經これなり。(新984、全708)

「原本」49頁には—この場合の釈尊は、当然、第六の釈尊、すなわち久遠元初の自受用身如来であられる日蓮大聖人の御事である。52頁には—「南無」とは梵語であって、これを漢語に訳せば「帰命」という。その帰命する対境、対象に「人」と「法」とがある。「人」とは、文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人である。「法」とは末法の法華經であり、法本尊であるところの南無妙法蓮華經である。すなわち、人法一箇の大御本尊に帰命することが、真実の中の真実の帰命。

上記が、「要文」8頁では—南無妙法蓮華經とは、大聖人が覚知された宇宙と生命を貫く根源の法そのもの、一念三千の法理そのものであるという大確信に立つことです。(中略)13、14頁では—南無妙法蓮華經(妙法蓮華經)とは単なる經題ではない。法華經の肝心であり根源の法そのもの、永遠なる生命の法則であるというのが、大聖人の覚り。(中略)14、15頁では—不變の真理を探究し、その世界に参入していく方向が「帰する」であり、その真理の大地を踏みしめた上で、今度は現実の世界に立ち戻り隨緣の智慧に「命(もと)づき」活動していくのです。それが南無妙法蓮華經への帰命です。

- ② 南無妙法蓮華經の続きで、中略の後、「(「要文」17頁)南無妙法蓮華經の「南無」とは梵語、「妙法蓮華經」は漢語なり。梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり。(新984、全708)、(さらに中略の後に)20頁には—「經」とは一切衆生の言語音声を経と云うなり。釈に云わく、「声、仏事をなす。これを名づけて經となす」。(新984、全集708)

「原本」74頁には—大御本尊を拝するに中央に「南無妙法蓮華經 日蓮」とお認めである。南無とは梵語、妙法蓮華經は漢語、日蓮は日本語である。(中略)これこそ日蓮大聖人の仏法が、日本のみならず、全東洋、全世界の仏法であることを、意義づける。

上記が、「要文」17頁では—「梵漢共時」—南無妙法蓮華經の題目は、梵語と漢語という異なる言語・文化が結合して成り立っていると仰せです。(中略)「梵漢共時」の南無妙法蓮華經とは、全人類のための「不變の法」である。

- ③ 方便品の一節 方便品八箇の大事 第一「方便品」の事（「要文」51頁）今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、これ秘妙方便にして体内なり、故に、「妙法蓮華經」と題して、次に「方便品」と云えり。（新993、全714）

「原本」179～180頁には—今、われわれ大御本尊を信じ南無妙法蓮華經と唱える者は、秘妙方便であり、大御本尊の体内 73頁には—久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷属であり、仏なのだと悟る、これが秘妙方便である。

上記が、「要文」54頁では—「今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、これ秘妙方便にして体内なり」と仰せです。「体内」とは、仏の覺りの内に納まっているということ。

- ④ 方便品の一節（上記の続き）（「要文」56頁）妙樂、記の三に釈して、本疏の「即ちこれ真の秘なり」の「即」を、「円をもって即となす」と消釈せり。即は円なれば、法華經の別名なり。即とは、凡夫即極、諸法実相の仏なり。円とは、一念三千なり。即と円と、言は替われども、妙の別名なり。一切衆生、実相の仏なれば、妙なり、不思議なり。謗法の人、今これを知らざるが故に、これを「秘」と云う。（新版993、全集714）

「原本」180頁には—即とは円であるから法華經の別名である。即とは凡夫即極を意味し、有作ではなくして諸法実相の仏なのである。ここに法華經とは、一往は二十八品再応文底からは大御本尊であり、凡夫即極、諸法実相の仏とは本有無作三身の日蓮大聖人である。

上記が、「要文」57頁では—九界の衆生が即、仏であるということが「円」、即ち完全な真実であり、それを説いているのは法華經しかないのです。

- ⑤ 方便品の一節（「要文」79頁）

「我」とは釈尊、「我実成仏久遠（我実に成仏してより久遠なり）」の仏なり。この本門の釈尊は、我ら衆生のことなり、「如我」の「我」は、十如是の末の七如是なり。九界の衆生は、始めの三如是なり。我ら衆生は親なり、仏は子なり。父子一体にして、本末究竟等なり。この我らを寿量品に無作の三身と説きたるなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱うる者これなり。（新1003、全720）

「原本」292頁には—此の本門の釈尊とは、本門文上の色相莊嚴の釈尊ではなくして、本門文底の釈尊、すなわち久遠名字即の凡夫であることは明らかである。（中略）別しては、御本仏・日蓮大聖人、総じては大御本尊を奉ずるわれわれ末法の衆生のことである。297頁には—無作三身とは、別して日蓮大聖人なのである。

妙法は法であり、日蓮大聖人は人であり、人法一箇なのである。ゆえに、もったいなくも、大御本尊の中央には、「南無妙法蓮華經 日蓮」としたためられている。その左右に釈迦多宝、あるいは上行等の四菩薩、さらには、声聞、縁覚、ずっと地獄の衆生までいることがわかる。これは、釈迦多宝といえども、大聖人の己心の釈迦多宝であり、大聖人の生命の働きであることを示すものである。したがって、釈迦多宝の二仏も、大聖人の御生命から出発するのであり、大聖人が親であり、釈迦多宝はそこから誕生する子なのである。さらにいえば、十方三世の一切の諸仏もまた子であり、大聖人は親であられる。

上記が、「要文」81頁では一この経文について、大聖人はまず、方便品で説かれている「我」とは、本門の久遠実成の釈尊であることを示されています。(中略)82頁では一そこには、教え導く側も、教わり導かれる側も、「皆が等しく仏」という法華經の智慧の根本が示されています。

⑥ 信解品六箇の大事 第五無上宝聚不求自得の事 (「要文」97頁)

今、日蓮等の類いの心は、無上とは南無妙法蓮華經、無上の中の極無上なり。この妙法を指して「無上宝聚」と説きたもうなり。「宝聚」とは、三世の諸仏の万行万善・諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華經なり。この無上宝聚を辛勞も無く行功も無く、一言に受け取る信心なり。「不求自得」とは、是れなり、(新1014、全727)

「原本」435 頁には一無上宝聚とは、大御本尊のことである、すなわち、大御本尊が、無上の宝の聚(あつまり)りなのである。

上記が、「要文」100 頁では一宝聚とは宝の集まりのことです。三世の諸仏が成仏するための一切の善行や修行の功德が納まっているのです。この偉大な功力を具えているのが南無妙法蓮華經である。

⑦ 法師品十六箇の大事 第一法師の事 (「要文」133頁) 御義口伝に云わく(中略)今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は法師の中の大法師なり、(新1026、全736)

「原本」584 頁には一法師の「法」とは南無妙法蓮華經、「師」とは日蓮大聖人のことであり、人法一箇を表わしているのである。585 頁には一人法一箇の文であられる。釈迦仏法は、人法勝劣一法が勝り、人が劣る。日蓮大聖人の仏法は、人法一箇である。

上記が、「要文」133頁では一まず、「法師」について、妙法の題目を唱え抜いている大聖人とその一門こそが「法師の中の大法師」であると仰せです。

- ⑧ 勸持品十三の大事 第十三「但惜無上道の事」(「要文」177頁) 御義口伝に云く、「無上道」とは、南無妙法蓮華經これなり、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經を惜しむことは、命根よりも惜しきことなり、これによつて結ぶ処に、「仏自知我心と説かれたり。法華經の行者の心中をば、教主釈尊、御存知有るべきなり、「仏」とは釈尊、「我心」とは、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。(新1044、全749)

「原本」809 頁には—無上道とは、南無妙法蓮華經のことである。すなわち、三大秘法の大御本尊のことである。808 頁には—法華經の行者の心の中を、久遠元初の自受用身如来である日蓮大聖人が、必ず知っておられるのである。仏とは文底の釈尊、すなわち久遠元初の自受用身如来

上記が、「要文」179～181 頁では—大聖人は、「無上道」とは南無妙法蓮華經のことであると明かされています(中略)181頁では—仏は妙法に生き抜く人間の尊極の命を深く「知って」いる。そして、末法において、この「根源」の一法を説き明かされたのが御本仏・日蓮大聖人です。「南無妙法蓮華經と唱え奉る者」の心に、久遠の仏の生命が脈動していくのです。

- ⑨ 涌出品一箇の大事 第一唱導之師の事(「要文」198頁) また云わく、千草万木、地涌の菩薩にあらずということなし。されば、地涌の菩薩を本化と云えり。本とは、過去久遠五百塵点よりの利益として、無始無終の利益なり。此の菩薩は本法所持の人なり。本法とは、南無妙法蓮華經なり。この題目は、必ず地涌の所持の物にして、迹化の菩薩の所持にあらず。この本法の体より用を出だして、止観と弘め、一念三千と云う。総じて大師・人師の所釈も、この妙法の用を弘め給うなり。この本法を受持するは、信の一字なり、(新1047、全751)

「原本」854 頁には—「久遠五百塵点」とは教相である。「無始無終」は久遠元初であり、観心である。ここでは当然、久遠元初の日蓮大聖人の仏法と拝すべきなのである。「本法所持の人」とは、別しては日蓮大聖人、教相では上行菩薩のことである。信心より拝すれば、大聖人の弟子である、われわれを指すのである。南無妙法蓮華經が本体であり、それから用(ゆう)をいだして、釈尊は法華經二十八品を説き、天台は摩訶止観を説いたのである。また、あらゆる大師、人師、例えば、竜樹、天親、妙楽、伝教も、南無妙法蓮華經の本体の用を弘めたに過ぎないのである。

上記が、「要文」199頁では—「本」とは、久遠五百塵点劫の過去から利益として無始無終の利益である。この地涌の菩薩は、本法(本源の法)を所持した人である。本法とは南無妙法蓮華經である。この南無妙法蓮華經の題目は、必ず地涌の菩薩が所持するものであって、迹化の菩薩が所持するものではない。

⑩ 寿量品の一節 寿量品二十七箇の大事

第一「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」の事（「要文」212頁）「如来」とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地の無作の三身なり。今、日蓮等の類いの意は、総じては「如来」とは一切衆生なり、別しては日蓮の弟子檀那なり。されば、無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華經」と云うなり。（新版1048、全集752）

「原本」16頁には—南無妙法蓮華經如来、すなわち文底の仏の寿量品である。釈尊の文上の寿量品と区別して、大聖人の立場、すなわち文底より読むがゆえである。文底の仏とは日蓮大聖人であらせられる。日蓮大聖人が「予が読むところの寿量品」と仰せられる、内証の寿量品である。南無妙法蓮華經如来は人、寿量品は法で、人法一箇をあらわす。44頁には—内証の寿量品により、如来寿量品第十六の「如来」を解釈するならば、如来とは久遠本果の三身、すなわち色相莊嚴の仏ではない。本地無作の三身、すなわち久遠元初の自受用身を如来というのである。45頁には—日蓮大聖人は、末法に、久遠元初自受用身の再誕として御出現になり、凡夫の当体、本有のままで、一切衆生の中に飛び込まれ、久遠元初の妙法、万法の根源、大宇宙の一切の変化の本源力たる南無妙法蓮華經を一幅の大御本尊として顕わされ、一切衆生に与えられたのである。

上記が、「要文」213頁では—如来とは、三世十方の仏たちに共通の名であり、本地の三仏（注6「本地」とは、本来の境地のこと。ここでは、久遠実成の釈尊が本地の仏であり、しかも、その一身に法身・報身・応身の三身を具えていることを、「本地の三仏」という。）の別名とされています。それを受けて大聖人は、如来とは、総じては一切衆生、別しては大聖人の弟子檀那であると述べられています。

（中略）「如来」といっても、妙法を持った人間自身にほかならない。本源の“もとのまま”“ありのまま”の久遠の生命を現わす衆生こそが真の如来である—。これが、御義口伝で示されている仏陀観であり、釈尊観であり、成仏観です。

⑪ 寿量品の一節 第三「我実成仏已来、無量無辺」等の事（「要文」218頁）今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、寿量品の本主なり。総じては、迹化の菩薩、この品に手をつけ、いろいろべきにあらざるものなり。彼は迹表本裏、これは本面迹裏なり。しかりといえども、しかも当品は末法の要法にあらざるか。その故は、この品は在世の脱益なり。題目の五字ばかり当今の下種なり。しかれば、在世は脱益、滅後は下種なり。よって、下種をもって末法の詮となす云云。（新1050、全753）

「原本」66頁には一第三「我実成仏已来無量無辺」の文は、一往は、インド応誕の釈尊の久遠成道を顕わす文である。しかし、日蓮大聖人は、この経文をもって、文上の釈尊の境地を述べようと、毛頭されていない。この経文を用いて、御自身の久遠元初の成道を説かれるのである。

63頁には一寿量品の本主とは寿量品の釈尊、教主と同じ。寿量文底の仏を言う。すなわちインドの釈尊は妙法五字を悟って寿量品第十六を解き明かしたのであり、根底はあくまでも南無妙法蓮華經である。したがって、真実の寿量品の本主とは南無妙法蓮華經をとかれた文底の釈尊である日蓮大聖人のことである。また総じて南無妙法蓮華經と唱える大聖人の弟子も、寿量品の本主とあらわれると仰せ下さっている。

上記が、「要文」219頁では一法華經の経文上においては、「寿量品の本主」一寿量品の教えを説く主体は、万人成仏の教えを説く釈尊です。しかし御義口伝では、題目を唱える「日蓮等の類い」が「寿量品の本主」であると仰せです。(中略)221頁では一地涌の菩薩は、仏に代わって、末法において題目を直ちに下種していく主体、主人公であり、「寿量品の本主」にほかなりません。そして、その「地涌の菩薩にさががけ」(新1790, 全1359)として、不惜身命の大闘争を貫き、妙法を弘められたのが大聖人です。さらに大聖人は、「日蓮の類い」と仰せの通り、門下たちも「寿量品の本主」とし、妙法を語り広げゆく主体としての崇高な使命を担っていることを宣言されました。その意味では「さががけ」を果たされた大聖人に二陣・三陣と続いて、妙法を下種しゆく地涌の菩薩たちが次々と出現しなければ、御義口伝は完結しないと言えましょう。

- ⑫ 寿量品の一節(上記の続き、中略の後) 第四「如来如実知見三界之相、無有生死」の事(「要文」240頁) 無作の三身の当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等なり。南無妙法蓮華經の宝号を持ち奉るが故なり云云。(新1051、全754)

「原本」78頁には一宝塔品第十一の儀式は譬喩蓮華、御本尊は当体蓮華である。また総じては宇宙の森羅万象、一切の現象が当体蓮華であり、妙法蓮華である。別していえば、日蓮大聖人の仏法を修行するわれわれのみが当体蓮華であるが、さらに別していえば、日蓮大聖人即大御本尊が、妙法蓮華の当体である。81頁には一無作の三身の当体の蓮華の仏とは南無妙法蓮華經如来たる日蓮大聖人のことであり、また南無妙法蓮華經と唱える日蓮大聖人の門下も、総じてはこれに含まれるのである。

上記が、「要文」240頁では一「無作の三身」一仏の三つの特性である「法身」「報身」「応身」の三身を、本来、具えている十界本有の仏とは、大聖人に連なる私たちであると仰せくださっています。

- ⑬ 寿量品の一節 第十六「我亦為世父」の事（「要文」258頁）御義口伝に云わく、「我」とは釈尊、一切衆生の父なり。主・師・親において、仏に約し、經に約す。仏に約すとは、迹門の仏の三徳は、「今此三界」の文これなり。本門の仏の主・師・親の三徳は、主の徳は「我此土安穩」の文なり。師の徳は、「常說法教化」の文なり。親の徳とは、この「我亦為世父」の文これなり。（新1056、全757）

「原本」210頁には一およそ三徳具備をもって、仏となし、本尊とするのである。末法において三徳具備を論ずるならば、仏に約せば、久遠元初自受用身三身如来即日蓮大聖人であらせられ、經に約せば、末法の法華經にして、寿量文底下種事行の一念三千の大御本尊であらせられる。（中略）日蓮大聖人こそ人の本尊であらせられ、御図顕の大御本尊こそ法の本尊であらせられる。しかし、人法一箇であり、法に則して人、人に即して法であり、末法のわれら衆生の一同に尊崇すべき三徳具備の当体なのである。（中略）されば、我亦為世父の文は日蓮大聖人の御事であり、（中略）日蓮大聖人こそ一切衆生の父であり、総じて、われわれもまた、一切衆生の父と仰せ下さっている。

上記が、「要文」259頁では一この御文では、久遠の仏「自身」の姿が主師親の三徳として説かれ、それを末法において実践されているのが、御本仏・日蓮大聖人に他ならないことが示されています。經文の「我亦為世父」は、「良医病子の譬え」の箇所、良医である父と同じく、釈尊もまた、現実の三界の「一切衆生の父」であり、良医が、とりわけ本心を失った迷いの子どもたちを救ったように、「顛倒」（法華經493頁）の人々をも全力で救済している、とあります。（中略）

末法にあつては大聖人こそが、また、その弟子たちが、民衆救済の大闘争に挑む、“一切衆生の父”の役割を担っていることが明かされます。

- ⑭ 寿量品の一節 第十九「每自作是念」の事（「要文」263頁）御義口伝に云わく、「毎」とは、三世なり。「自」とは別しては釈尊、総じては十界なり。「是念」とは、無作本有の南無妙法蓮華經の一念なり。「作」とは、この「作」は有作の作にあらず、無作本有の作なり云云。（中略）今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る念は、大慈悲の念なり云云。（新版1057、全集758）

「原本」225頁には一「別しては釈尊」とは、末法において、日蓮大聖人の御事であり、即御本尊のことである。ただし、ここでは、まだその釈尊の実体は明かされず、一往、仏という意味で釈尊と標したのである。

上記が、「要文」264頁では一「毎」とは、三世永遠を意味し、「自」とは釈尊自身であるとともに、十界本有の原理に照らし、私たち自身のことである。

*この寿量品の一節に(中略)があります。そこには―「広く十界本有に約して云わば「自」とは、万法己己の当体なり。「是念」とは、地獄の呵責の音・その外一切衆生の念念・皆是れ自受用報身の智なり。是を念とは云うなり」―と記されていますが、「要文」では引用されていないのです。なぜ、「自受用報身の智」の重要部を除いているのですか？

- ⑮ 常不輕品三十箇の大事 第十三常不值仏不聞法不見僧の事（「要文」280頁）末法の「仏」とは、凡夫なり、凡夫僧なり。「法」とは、題目なり。「僧」とは、我等行者なり。仏とも云われ、また凡夫僧とも云わるなり。「深く円理を覚る。これを名づけて仏となす」の故なり。「円理」とは、法華經なり云云。（新1067、全766）

「原本」396 頁には一種脱相對して、末法下種の人本尊を明かした御文であり、即日蓮大聖人の御身をさす。（中略）「円理とは法華經なり」と申されているように、独一本門、三大秘法の南無妙法蓮華經をいう。

399 頁には―御本仏日蓮大聖人こそ、末法の仏宝であらせられる。法宝とは、この仏の説かれた教法であり、一切衆生皆成仏の法、哲理である。僧宝とは、この仏の意志を受け継ぎ、法を実践し、弘める人である。したがって、末法の法宝は三大秘法の御本尊であり、僧宝とは、二祖日興上人である。いま「僧とは我等行者なり」とは、総じて、妙法を信じ行学に励む者が僧であるとの意である。

上記が、「要文」280 頁では―末法の「仏」とは、凡夫であり、凡夫僧である。「法を聞かず」という「法」とは、題目である。「僧を見ず」の「僧」とは、私たち法華經の行者のことである。仏とも言われ、また凡夫僧とも言われる。「深く円理を覚る。これを名づけて仏となす」のゆえである。「円理」とは法華經である。

以上、池田先生の「御義口伝講義」(上)(下)と、新刊の「御義口伝要文講義」とを、再度、簡潔にまとめた15のご紹介です。これらから判明し得たことは、「要文」が日蓮仏法の根本的正義である「日蓮大聖人は久遠元初の自受用身如来であり、人法一箇の曼荼羅御本尊の御当体そのもの」との意義を排斥、認めないことでした。そして、この根本義を、現代、及び、末法万年にわたる全人類へ、分かり易く解説された池田先生の「原本」のご教示が、悉く、改竄され、釈迦本仏論にすり替わっていたことです。

「要文」は、なぜ今、三代会長のご垂教を無視、改竄するのですか？私の生命には池田先生の「御義口伝講義」に込められた、人類の平和、一人一人への愛の獅子吼が溢れてやみません。その先生のご教示を改竄することを、私は絶対に許すことができません。

あとがき

本稿を終えた今、いくつかの所感があります。3つほど記します。

1. 先日4月20日は、聖教新聞創刊記念日でした。当日、ある方から下記連絡を頂きました。— 今日の聖教新聞5面の開目抄の解説、竜ノ口法難のところで、発迹顕本の説明が一宿業や苦悩を抱えた迷いの凡夫の身の上に、生命に具わる根源的な、慈悲と智慧にあふれる仏の境地を顕されたことを示していると拝せれます。これを「発迹顕本」いいます—と説明していますが。凡夫としての迹の姿から久遠元初自受用身の本地を開顕されたことが本当の意味であり、それが記されていません。—と。

私はその記事は未読でしたので、すぐに読みました。その方の指摘の通りでした。その全文では、発迹顕本について様々な美辞麗句を並べて、その境涯を表現しようとしています。所詮、全人類を等しく大境涯に導く、根本仏としての大慈悲の所作(御本尊を開顕された)、いわば出世の本懐に繋がる論調が無い。画竜点睛を欠いていました。(御本尊を受持し、唱題に励むことによる)一生成仏、人間革命への直道を説き、確信に満ち溢れた講義を受講することで大歓喜を呼び起こすことが出来た我が身の経験からしても、余りに御本仏の獅子吼の精髓が分からぬ、浅薄で未熟な文上講義であると断じます。

こんな解釈、三代会長がされたか、**池田先生の「御義口伝講義」と「法華經の智慧」**のどこに、このような論述があるか！私は入信して70年間、見たことのない作文に、正直、大聖人と三代会長のお心に背く解釈をよくも平気でできるなと思いました。**大聖人の竜の口の発迹顕本は南無妙法蓮華經の威力を100%発揮されたことによって大聖人が名字凡夫の身のままに久遠元初自受用身の生命を顕現した偉大な瞬間です。そこから凡夫即身成仏の明鏡であるご本尊のご図顕が始まったのです！**

この記事を書いている人は必死の唱題を貫いて逆転勝利する深い信心体験してないため、観念だけのふにゃけた記述しか出来ないのだと感じました。以前の聖教の記事は、執筆者が胸奥に抱く御書への畏敬と、溢れんばかりの説得力がありました。私たちに伝わりました。それが、今は残念ながらありません。以下、戸田先生の感動的な**発迹顕本**の講義、本義の4つを引用、ご紹介申し上げます。

由比ヶ浜辺の首の座より無作三身自受用報身を証得して、その御内証は寿量品の文底下種・事行の一念三千の南無妙法蓮華經である。されば大聖人は脱益寿量文底の本因妙の教主であらせられるから、一切經を読まずとも、一切經の仏菩薩が大聖人に随従し、かつ一切經の功德が大聖人に雲集しているのである。(戸田城聖全集第6巻開目抄講義 356 頁)

丑の刻はすなわち陰の終わり、寅の刻はすなわち陽の初めであり、死の終わりと生の初めで、すなわち正死の間である。ゆえに御書には「三世諸仏の成道はねうしのをわり・とらのきざみの成道なり」(全集 1558 頁 上野殿御返事)と。ゆえに子丑の刻は大聖人の凡身が死にいたる終わりであり、頸を刎ねらるる寅の刻は久遠元初自受用身の生の始めである。

房州日我の本尊抄見聞には「開目抄に魂魄佐渡に到るとは凡夫の魂魄に非ず、久遠名字本仏の魂魄なり」といっている。釈迦は二月八日、明星の出る時大悟し、大聖人はまた九月十二日、明星の輝く寅の刻に久遠元初の御本仏と顕れ給うたのである。(同第6巻 開目抄講義 371 頁)

「このとき(竜の口の法難を乗り越えられた時)に、初めて上行菩薩の垂迹の姿を捨てて久遠元初自受用身如来の姿を顕わされるのです。これ以降はすべての御振る舞いが仏なのです。その前は上行菩薩の再誕です。今後は久遠元初自受用身如来の御境地を顕わされるのです」(同第7巻 種種御振舞御書講義 561 頁)

次に、池田先生の「開目抄」講義(池田大作全集 第34巻)の23頁には以下のようにございます。— 「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へ贈ればおそろしくておそろしからず・見ん人いかに・をぢぬらむ」(新102、全223頁)まさに、「大聖人の魂魄に目を開け」と仰せの御文である。ここで大聖人は、「竜の口の頸の座において凡夫・日蓮は頸をはねられた。今、佐渡で『開目抄』を書いているのは、日蓮の魂魄そのものである」と言われている。この「魂魄」とは、発迹顕本された御内証である「久遠元初自受用身」にほかならない 一と。

さらに、「御書の世界」第2巻、130～147頁には、次のようにあります。池田先生のご指導をまとめました。

発迹顕本から御本尊御図顕へ 大聖人の御生涯の中でも、いよいよ、御本尊を御図顕されていこうとする転機となったのが、竜の口法難における「**発迹顕本**」だったのです。(中略)大聖人御自身が、「永遠の法」即「**永遠の仏**」である**自受用身の仏とあらわれたのです**。しかも、凡夫の身のままで、というところに大きな意義があると拝したい。(中略)日蓮大聖人が凡夫の身のままで、**自受用身の仏**として顕れたからこそ、末法の一切衆生を救う**御本尊を御図顕**される意義が生まれるのです。

人本尊開顕と法本尊開顕 「開目抄」は「**人本尊開顕**」の書です。日蓮大聖人が御本尊を御図顕されるにあたって、御本尊を御図顕する日蓮大聖人とはいかなる方なのかを明らかにされています。(中略)大聖人は、法を守り、民衆を守るために、人々の成仏を妨げる魔性の悪僧との戦いを起こし、大難を受けられる。そして、その現実の御姿の中に、末法の人々を救う「主師親の三徳」が具わっていることを示されるのです。(中略)

死身弘法という具体的な振る舞いを通して、尊極の法と一体の御内証を示されているのです。その「実例」によってしか、人生の究極の意味としての「本尊」、つまり「永遠の法」と一体の「永遠の仏」という尊極の生命は示せない。そこに「**人本尊開顕**」の書である「**開目抄**」を著された深い意味があると拝したい。

「**法本尊開顕**」の書である「**観心本尊抄**」ですが、今度は、御内証を御本尊として顕されることについて徹底的に示されている。(中略)「開目抄」「**観心本尊抄**」の両方が、ある意味では補いあうことによって、末法の御本尊御図顕の意義が鮮明にされている。両書によって、日蓮大聖人の仏としての化導の意義がはっきりします。一言で言えば、**日蓮大聖人が、久遠元初自受用身如来を証得されていくまでの戦いの御姿が示されているのが「開目抄」**です。そして、久遠元初自受用身如来の御境地にある末法の御本仏として、全人類の救済のために、**御本尊を御図顕していくことが示されているのが「観心本尊抄」**です。(中略)

凡夫に内在する御本尊 大事なことは、「永遠の法」と一体の「永遠の仏」の生命は、身口意の三業にわたる全人格的な行動の中で現れるということです。日蓮大聖人御自身、法を説き、大難を超えながら、「永遠の法」と一体の**久遠元初自受用身の御生命を顕されていかれた**。つまり、久遠元初自受用身の御生命は、身口意の行動のなかで成就されたのである。**その御生命を認められたのが御本尊であられる**。一と。

戸田先生の講義で重要なのが、開目抄の「**日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ**」そして、上野殿御返事の「**三世の諸仏の成道はねうしのをわり・とらのきざみの成道なり**」の二つの御文からなる論点で、ねうしの時に首をはねられたことは、上行菩薩の終わり、仏の始まりを意味しているのは明らかです。**そうしたご自覚が大聖人にはあったという証拠です。**

戸田・池田先生の講義の何と素晴らしいことでしょう！僭越ながら、両先生の獅子吼、大聖人様の正義、真意、大慈悲を代弁されたご指導は、私たちの求道の生命にダイナミックな感応妙として届くのです！もとより、聖教新聞の記事には、戸田・池田両先生の思いを期待することは出来ません。あってはなりません。ただ、しかし、一言申し上げれば、聖教新聞の存在意義を鑑みた時、日蓮大聖人の御書を解説することがどれほどの重大事、責任の伴うことであるかは、言うまでもないことなのです。

聖教新聞の読者は、命がけで読まれるのです！4月20日、朝一で聖教新聞を読んだ私の友人は、きっと「**今日は聖教新聞の創刊記念日だ！どんなに素晴らしい記事が溢れているだろう！**」と、心躍らせて、紙面に臨まれたはずなのです。その、まさに、菩薩、仏の生命の方をがっかりさせては絶対にならないのです！聖教新聞の執筆者の方々には世界中の仏様である学会員さんに、勇気と感動、生き抜く希望を与えるという使命と責任、そして栄誉があるのです。それを絶対に忘れないで頂きたいのです。

はっきり申し上げて、4月20日の記述—**宿業や苦悩を抱えた迷いの凡夫の身の上に、生命に具わる根源的な慈悲と智慧にあふれる仏の境地を顕されたことを示していると拝せれます。これを「発迹顕本」いいます**—を、大聖人様、そして、戸田・池田両先生が読まれて、どのように感じられるでしょうか！「なぜ、**発迹顕本の本義は、久遠元初の自受用身如来の本地を表されました！と書かない！**」と言われるに違いありません。戸田・池田両先生のご教示は、それしか他にはないのですから。

「**教学要綱**」では日蓮について発迹顕本の表現は一切見えず、全体を通して「**久遠元初**」や「**自受用身**」の用語も一切用いていないです。これ以上、ここでは多弁しません。結論、私は「**教学要綱**」のこの底意が聖教新聞、大白蓮華にまで潜入していると思っています。日蓮大聖人様のご生涯で最も偉大なる「**発迹顕本**」について何も記さない「**教学要綱**」は、**絶版にすべきです！**皆様のご意見、ご高見を拝したいです。 59/75

2. 昨年「**教学要綱**」が私の心を苦しめる中、7月に発刊された須田晴夫著「新版 生命変革の哲学 日蓮仏法の可能性」を読み、「**共業（ぐうごう）**」という概念を初めて知りました。私はこの言葉が御書にあるのかを検索しましたがありませんでした。そして、この「**共業**」の概念は、個人と集団、日本と世界が当面する諸問題を仏法的に捉える大事な視点であると同時に、結論、今の創価学会員の教学への無関心も「**共業**」であるとの思いになりました。

「**共業**」について、須田氏の著作には次のように記されています。
一日蓮が「父母となり、その子となるも、必ず宿習なり」（「寂日房御書」1269頁）と述べているように、子となり親となるのも自身の業による。お互いの業の一部を共にしているからこそ親子や兄弟となり、一つの家族を形成するのである。（仏教では業を共有することを「**共業**」と呼ぶ）。（47頁）

一業が蓄積される阿頼耶識は一個体の生命を超えて他の生命と連なっていく面を持つ。業は各個人が単独で形成する場合だけでなく、他と共同し、関連し合って形成される。仏教では多くの生命が共通して感じる業を「**共業**」という。たとえば、ある時代の小学生の同級生が、男子は成人して全員が徴兵されて戦場に駆り出され、大半が戦死したという場合、その同級生たちは戦場に駆り出されて死んでいかなければならないという同一の業を共有していたことに為る。同じ宿業を共有していた人たちが同級生という一つの集団を形成していたのである。複数の人が共通して持つ歴史的体験は「**共業**」に当たると言えよう。（109頁）

一池田大作は『**法華経の智慧**』第四巻で次のように述べている。「八識をも包みゆく宇宙生命それ自体―第九識といわれる『根本浄識』を触発することによって、一気に、善悪の業エネルギーを『極善』のエネルギーに変えていく方法を教えたのが法華経なのです。寿量品の『久遠の仏』とは、この無始無終の根本浄識の人格的表現とも言えるでしょう。**この根本浄識を触発することによって、個人の善悪の業エネルギーは、全て価値創造へ向かう。さらには民族心（民族意識）、人類心（民族意識）をも、慈悲と智慧の生命流に浸していけるのです。**」（中略）

日蓮は（中略）第九識の仏の生命を南無妙法蓮華経と名付けてそれを曼荼羅本尊に表し、万人に仏の生命を現わす道を開いた。（同書352頁）―と。

私は、この「共業」の考えを、池田先生の書籍―新しき人類を 新しき世界を (2002年) ヴィクトル・A・サドーヴニチィ ((池田大作全集113))の中に見つけました。次のようにございます。 - 人間生命の深層にある宇宙大の生命次元へ -

池田 人間の営みであるそれぞれの階層の「共業」も、個人から家族、民族をへて、人類、大自然へと開かれていきます。(中略) 閉ざされた部族意識、民族意識の次元での「共業」を打ち破る、さらに深い次元からの、開かれた人類意識の発現——これが、仏教の業論(共業)から導き出される人間観、平等観です。(中略)

仏法では、一個の人間生命の内奥を洞察し、人類意識をも超えた宇宙大の生命を見出しました。この偉大なる宇宙生命を仏法では「仏性」と呼んでいます。宇宙生命には、万物を育みゆく慈悲と智慧が横溢しております。仏法は、この宇宙大の慈悲と智慧を顕現することにより、人の生命から家族、民族、国家、人類の「共業」まで、根本的な変革が可能になると説きます。私どもが推進している人間革命運動も、そこに大きな意義があると思っています。

サドーヴニチィ 世界に広がる創価学会インターナショナルの運動の根底には、深い仏教哲学とそれへの信仰に貴かれた実践があるのですね。一と。

私は、上記、須田氏の論考と池田先生のご指導を拝して、大言壮語ながら、人類の宗教史、仏教各派の分裂、日蓮仏法における五老僧の違背、そして、畢竟、この度の「教学要綱」をめぐる学会員の教学への無関心と、攻撃的排他性の底に共通してあるのが、善悪にわたる「共業」の存在なのだと思います。それはまた、旧態依然たる既存意識と改革意識、また、根本的には正邪の「共業」のせめぎ合いであり、「仏法は勝負なり」のご金言の通り、仏と魔、とりわけ第六天の魔王に支配された「共業」への、正義の覚醒、戦いなのだと思うに至りました。

この20数年間、創価学会は、三代会長、就中、池田先生が「法華経の智慧」で記し残された日蓮仏法の正義を削除、改悪してきたと思っています。その典型が「久遠元初の自受用身如来」と「人法一箇」を削除してきたことです。これは、日蓮仏法の破壊であり、日蓮が魂である御本尊様の否定です。

私は、結論、日蓮仏法を否定する「共業」の結晶である「教学要綱」を絶版にすることが、今、一番必要なことだと思っています。それは、既述の通り、「日蓮は誤りである」とする官田幸一氏が「教学要綱」を記したことが明白になった現在、どんな反駁も出来ないからです。

3. 本日、創価学会の日、私は、**池田先生の会長就任式の挨拶**が池田大作全集に掲載されているか調べましたがありませんでした。友人からは、全集は編集方針が1986年11月以降（「人間と仏法を語る」第1巻以降）を収録とのことで、会長就任時のスピーチは載っていないとのことでした。そして、私はネットに下記があることを知りました。— グローバル Web アイコン 創価学会が大好き <https://soka.kailax7.com/archives> 昭和35（1960年）年5月3日 池田先生第三代会長就任挨拶 日大講堂 より—

— 若輩ではございますが、本日より戸田門下生を代表して、化儀の広宣流布をめざし、一步前進への指揮をとらせていただきます。申すまでもなく、わが創価学会は、日蓮正宗の信者の団体であります。したがって、私どもは大御本尊様にお仕え申し上げ、御法主上人猊下に御奉公申し上げることが学会の根本精神であると信じます。初代会長・牧口常三郎先生、また第二代会長・恩師である戸田城聖先生の、総本山に忠誠を尽くされたその心を心として、今、私は全学会員を代表して、日達上人猊下に、より以上の御忠誠を誓うものでございます。（中略）どうか、人のため、我が身のため、国のため、護法のため、全衆生のために、御本尊様を根本として、しみじみと大御本尊様の有難さを感じつつ邁進していきたいものと思います。以上をもって就任の挨拶と致します。—と。

ところが、私の所蔵する「**会長講演集**」第1巻6頁には、5月3日の日大講堂での池田先生の会長就任式は第二十二回本部総会も兼ねていて、その挨拶の最後には、下記の記述があります。

—先哲が、また、先師が、宗教批判の原理として、五重の相對、四重の興廢、三重秘伝、または教機時国教法流布の先後、文証、理証、現証と、はっきりと、宗教の浅深、勝劣の分け方を残されておりますが、絶対に法華經に帰趨する。八万法藏の極地は法華經である。その法華經とは、末法においては三大秘法の南無妙法蓮華經であり、それ以外の宗教は邪教であり、三大秘法の御本尊様のみが、末法万年尽未來際の衆生を、お救いくださるただ一つの宗教であるということを、声を大にして叫びきっていききたいと思うのでございます。

今、創価学会は、二祖**日興上人様**の、大聖人様のお教えを正しく奉持しゆく精神、お守り申し上げていく精神、そしてまた、老齡七十幾歳にして国家諫曉すること数十度、あくまでも、実践をあそばされた**日目上人様**の御精神、そしてまた、全邪宗教を打ち破っていく**日蓮大聖人様**の大生命哲学を、そのまま御解明くださった**日寛上人様の絶対なる教学の深遠なる精神**、その精神を精神として、広宣流布をめざして、そのまた一目標である七回忌をめざして進んでいきたいと思います。以上をもって講演といたします。—と。62/75

昭和 35 年 5 月 3 日の池田先生の会長就任式の挨拶を初め「池田会長全集」以前のスピーチが「池田大作全集」に含まれていないことは残念です。特に、先生の最後の挨拶のところは、先生が日蓮仏法の正義、本道である日興門流の日寛上人様の絶対なる教学を、広宣流布のために最大に尊敬し用いていかれると宣言された原点のご挨拶ですので、是非、遡って記し残して頂きたいと願うばかりです。

そして、本年は池田先生の会長就任 65 周年です。先生は会長就任 19 年目の 1979 年（昭和 54 年）4 月 24 日に勇退されましたが、その時の様子、ご心境が随筆「桜の城」61 頁に、下記のように記されています。

— 1979 年（昭和 54 年）の四月二十四日—。この日、私は、十九年間にわたって務めた、創価学会第三代会長を退き、名誉会長となった。全国の、いや、全世界の同志は、その発表に、愕然として声をのんだ。その背後には、悪辣なる宗門の権力があり、その宗門と結託した反逆の退転者たちの、ありとあらゆる学会攻撃があった。なにか、私を破壊させようとした、言語に絶する謀略と弾圧であった。正義から転落した、その敗北者たちは、今でも、その逆恨みをはらさんと、卑劣な策略を続けている。これは、ご存じの通りである。御聖訓には、随所に説かれている。「法華經の行者は、諸々の無智の人のために必ず悪口罵詈等の迫害を受ける」（趣意、御書 140 頁等）と。広宣流布の大闘争のゆえに、「悪口罵詈」されるのが、真の法華經の行者といえるのである。さらに、「佐渡御書」には、「賢人・聖人は、罵詈して試みるものである」（通解、御書 958 頁）と。

真実の信仰者は、罵詈され、讒言され、嘲笑されて、初めてわかる。畜生のごとき坊主らの暴圧による、わが友たちの苦悩を、悲鳴を、激怒の声を聞くたびに、私の心は血の涙に濡れた。心痛に、夜も眠れなかった。私は、健気な創価の同志を守るため、一心不乱に、僧俗の和合の道を探り続けた。しかし、後に退転した、ある最高幹部の不用意な発言から、その努力が、いっさい水泡に帰しかねない状況になってしまったのである。それは、最初から、学会破壊を狙っていた仮面の陰謀家どもの好餌となった。坊主らは、狂ったように、「責任をとれ」と騒ぎ立てた。私は苦悩した。—これ以上、学会員が苦しみ、坊主に苛められることだけは、絶対に防がねばならない。戸田先生が「命よりも大事な組織」といわれた学会である。民衆の幸福のため、広宣流布のため、世界の平和のための、仏意仏勅の組織である。私の心中では、ただ一身に泥をかぶり、会長を辞める気持ちで固まっていった。また、いずれ後進に道を譲ることは、何年も前から考えてきたことであった。ある日、最高幹部たちに、私は聞いた。「私が会長を辞めれば、事態は収まるんだな」。沈痛な空気が流れた。やがて、誰かが口を開いた。「時の流れは逆らえません」沈黙が凍りついた。わが胸に、痛みが走った。

一たとえ皆が反対しても、自分が頭を下げて混乱が収まるのなら、それでいい。実際、私の会長辞任は、避けられないことかもしれない。また、激しい攻防戦のなかで、皆が神経をすり減らして、必死に戦ってきたこともわかっている。しかし、時流とはなんだ！問題は、その奥底の微妙な一念ではないか。そこには、学会を死守しようという闘魂も、いかなる時代になっても、私とともに戦おうという気概も感じられなかった。宗門は、学会の宗教法人を解散させるという魂胆をもって、戦いを挑んできた。それを推進したのは、あの悪名高き元顧問弁護士たちである。それを知ってか知らずか、幹部たちは、宗門と退転・反逆者の策略に、完全に虜になってしまったのである。

情けなく、また、私はあきれ果てた。戸田会長は、遺言された。「第三代会長を守れ！絶対に、一生涯、守れ！そうすれば、必ず広宣流布できる」と。この恩師の精神を、学会幹部は忘れてしまったのか。なんと哀れな敗北者の姿よ。ただ状況に押し流されてしまうのなら、一体、学会精神はどこにあるのか！（中略）やがて、暗き四月二十四日を迎えた。火曜日であった。全国の代表幹部が、元気に、新宿文化会館に集ってきた。しかし、“七つの鐘”を打ち鳴らし新たな出発となるべき意義ある会合は、私の「会長勇退」と、新会長の誕生の発表の場となってしまったのである。大半の幹部にとって、まったく寝耳に水の衝撃であった。私は途中から会場に入った。「先生、辞めないでください！」「先生、また会長になってください！」「多くの同志が、先生をお待ちしております！」などの声があがった皆、不安な顔であった。「あんなに暗く希望のない会合はなかった」と、当時の参加者は、皆、後に、怒り狂っていた。私は、厳然として言った。「私は何も変わらない。恐れるな！ 私は戸田先生の直弟子である！ 正義は必ず勝つ！」と。

あまりにも 悔しき この日を 忘れまじ 夕闇せまりて 一人 歩むを

これは、四月二十四日に記された日記帳の一首である。我が家に帰り、妻に、会長を辞めたことを伝え、妻は、何も聞かずに「ああ、そうですか……。ご苦労様でした」と、いつもと変わらず、微笑みながら、迎えてくれた。

私見：上記を拝し、毎年巡り来る4月24日と5月3日、この真実の歴史を、私たちは永遠に忘れてはならないと決意しています。

さらには、下記のご揮毫や脇書きから、池田先生のご心痛と、私たち弟子へのご期待を感じるの、私だけではないと思います。

4月12日	中国全国人民代表大会常務委員会副委員長の鄧穎超氏（周恩来夫人）と迎賓館で会談。会長辞任の意向を伝える（東京）
昭和54年 (1979年) 22日	宗門との問題に終止符を打ち、会員を守るために法華講総講頭辞任の意向を表明（静岡）
24日	聖教新聞に所感「七つの鐘」終了にあたって」を寄稿 創価学会第3代会長を辞任。名誉会長に就任
25日	※退転・反逆者や宗門僧は創価の師弟の分断を謀り、池田先生の会合での指導や、その新聞掲載等を禁ずる 聖教新聞に「全国会員の皆様へ」とのメッセージを寄稿
5月3日	「七つの鐘」総仕上げ記念第235回本部幹部会（東京） 「七つの鐘」総仕上げ記念第40回本部総会。「大山」「大桜」と揮毫（創価大学） 神奈川文化会館を訪問。「共戦」と揮毫し、「生涯にわたり われ広布を 不動の心にて 決意あり 真実の同志あるを 信じつつ 合掌」と協書を記す
5日	「正義」と揮毫。「われ一人正義の旗持つ也」と協書を記す（神奈川）

「生涯にわたり われ広布を 不動の心にて 決意あり 真実の同志あるを

信じつつ 合掌」 私共は、5月3日の池田先生のこのお言葉、思いを永遠に忘れてはならないと決意致します。

また、先日、池田先生の下記ご指導を拝しました。（1989.10.12.第11回関西総会.関西文化会館一広宣流布の錦州城たれ（池田大作全集第073巻P.244より抜粋）

革命の炎と生きた吉田松陰 松陰はある時、門下に対しこう言った。『**自分は、成否はともあれ、忠義の赤誠を貫くつもりである。それなのに諸君は手柄をたてるつもりなのだ。意見が違い、生き方が違う**』と厳しく指弾したのである。すなわち、これは松陰が、門下の久坂玄瑞、高杉晋作らを名ざして批判し、絶交した時の言である。一諸君には、私の心がわからない。一ああ、真の同志は、まことに少ない。松陰は嘆いた。この師弟に何があったのか。時に、松陰にとって最後の年、安政六年（一八五九年）一月のことであった。この年の十月に彼は刑死する。（安政の大獄）（中略）

松陰の思いは激しかった。つねに生き急ぎ、死に急いでいたかのごとき松陰。生きることにも心急ぎ、死にゆくことにも急であった。その心は私にも痛いほど、よくわかる。青春の日、私は思い定めていた。「**戸田先生のご存命中に死のう**」と。私には妻も子もあった。しかし、後世に戸田門下生の範を示しておきたかった。こういう地涌の闘士がいたのか、末法広宣流布に殉じた若武者がいたのか——と。しかし、その心を戸田先生に見破られてしまった。「大作、お前は死に急いでいる。それは困る。お前が死んだら、俺のあとはどうなるのだ！」それで私は生きた。生きぬく以外になくなった。生死を超えた師弟であった。厳粛にして美しき、一体の師弟の絆であった。何ものも、その間に介在することはできなかった。（中略）

一高杉、久坂、中谷らは皆、「ぬれ手で粟をつかむ」つもりなのか——。松陰の言葉は、いよいよ激しい。高杉よ、久坂よ、「**時を待て**」とは何たる言い草だ。皆、**苦勞もせず「ぬれ手で粟」で、功名のみを得ようというのか、と**。師はだれよりも弟子を知る客観的には、あるいは弟子たちの状況判断にも無理からぬ面があったかもしれない。実際、そう論じる人もいる。また「手柄」を立てることが悪いというのでもない。何の手柄も立てられないのでは、しかたないともいえるかもしれない。しかし松陰が言いたいのは、そんなことではなかった。**自分と弟子たちの「奥底の一念の差」を嘆いたのである。「革命のための人生」なのか。それとも「人生のための革命利用」なのか。私どもで言えば、広宣流布のために自分をささげるのか。自分のために広布を利用し、信心と学会を利用するのか。この「一念の差」は微妙である。**（中略）

しかし、その結果は大きく異なる。広布のため、正法のために——との信心の一念は、諸天を大きく動かし、友の道を限りなく開いていく。自身の生命にも、三世永遠の福德の軌道、確たる「ルール」が築かれていく。反対に、口には広布を唱え、裏では、心堕ち、銭に執着し、身が堕ちてしまった人間もいる。立場や名利、金銭に執着し、その心を本として、たくみに泳ぎつつ生きていく。これまでの退転者らがそうであった。また、人に認められよう、ほめられようとの一念で行動する人もいる。しかも自分では、けっこう頑張っているつもりでいる。

自分で自分のエゴがわからない。松陰がここで言うのも、弟子たちが自覚していない、心の底の「臆病」と「野心」を撃っているのである。弟子を知る者、師にしかず一。師匠には弟子が自分で気づかぬ心までわかっている。反対に、師の心を知る弟子はあまりに少ない。(中略) 松陰の門下は師から遠ざかった。「先生、おとなしくしててください。今は、行動しないで、静かにしててください」——彼らの心根を一言で言えば、こうであった。そこには師を危ない目に遭わせたくない、という心情もあったつもりかもしれない。しかし、その本質は、師の心を知らず、自分たちの賢しきな考えにとらわれていた。臆病の心もあった。「先生のおもりに困っているんだ」とさえ、愚痴を言った門下もいる。これは手紙が残されている。松陰は嘆いた。(中略)

民衆は弱いようで強い。いざとなれば権力など、ものともしない。怖じない。無名の民衆の力こそ、革命の真の原動力である。広布という未聞の大業もまた、無名の庶民によって、たくましく切り開かれてきた。松陰が、この「民衆決起」の考えにいたった発端は、どこにあったか。それは日蓮大聖人の戦いであった。彼は書いている。日蓮大聖人の権力をものともしない「民が子」としての戦いが時代を超えて松陰に飛び火し、明治維新の淵源をもつくっていったのである。こうした手紙を書いた約半年後、松陰は江戸で処刑される。門下の衝撃は大きかった。「仇を報わでは」と、皆、泣いた。そして、師の手紙や遺文を集めた。それぞれが、ばらばらに持っていたものを結集し、皆で学んだのである。そこで、初めて弟子たちは松陰の真意を知った。「これが、わが師の心であったのか」——。その思想の深さ、慈愛の大きさ。あらためて自分たちが師を知ることのあまりに少なかったことを悔いた。(中略)

革命の本格的な狼煙は、ここから広がり始めたのである。やがて「民衆決起論」は、高杉晋作の奇兵隊(農民まで含めた新軍隊)を実現させた。そればかりではない。松陰の「幕府もいらぬ、藩もいらぬ」との到達点紙は、久坂玄瑞を通じて坂本竜馬に、そして全国の志士たちへと伝えられ、革命の爆発の発火点となっていった。孤独のなかの松陰の魂の叫びが、やがてこだまにこだまを重ね、新しい時代を開いていったのである。(中略) ともあれ、時の権力者とまっこうから戦うなかで、名もなき庶民をこのうえなく愛され、大切にされた日蓮大聖人。その大聖人に、みずからの革命思想の偉大な模範を見いだしたのが吉田松陰であった。そして、「民衆」への限りない御慈愛をそそがれて戦われた大聖人のお心のままに、広宣流布への民衆の大河を、広く深く築いているのが、私ども創価学会であると、重ねて申し上げておきたい。一と。

私見：上記、池田先生のお心を、心肝に染めたく存じます。また、日蓮仏法が明治維新の淵源であったことも初めて知りました。さらに襟を正して教学を研鑽したく決意致します。

そして、5日前4月28日、**立宗宣言の日**、小説「**人間革命**」第6巻を拝しました。次のようにございます。(31～45頁より抜粋)

四月二十八日のその日は、快晴であった。(中略)時は、刻々と正午に近づいていく。(中略)

蓮長は、数珠を掌にかけると、軽く揉んで、いきなり、「**南無妙法蓮華經**」と、三遍、唱題を繰り返した。幅広い、活力にみなぎった、清々しい音声である。しかし、誰ひとり、この唱題に和する者はいない。好奇心にみちた聴衆の目は、一瞬、奇異な眼差しに変わった。(中略)

建長五年四月二十八日、**日蓮と名乗りをあげた是生房蓮長**は、末法という時代の解明から、釈迦仏法が、すでに功力をまったく失ったことを宣言した。(中略)

彼の胸中には、自己の悟達した仏法の真髓による、民衆救済への広大な慈悲以外、なにものもなかった。宗教革命に徹する青年僧の、峻厳な姿が、ここにあったのである。

先覚者の道は、一人立つことから始まる。いつ、いかなる場合でも、胸中に刻印された真理をもとに、時代をリードしていかなければならない。そのためには、これまで親しかった人々が、百八十度転じて、非難、嘲笑を浴びせようとも、いささかの逡巡も許されなかった。

青年僧の、人類救済への船出は孤高でさえあった。だが、彼は、限らない未来を展望していた。やがて、その所説が、万人の心をとらえ、時代の真理として輝きわたることを、強く確信していたに違いない。

また、「**御書の世界**」第3巻194, 196頁の下記も拝しました。

名誉会長 戸田先生は講演をこう結ばれている。「**弟子は弟子の道を守らねばならぬ。ことばも、実行も、先生の教えを、身に顕現しなければならない**」私も、同じ覚悟で戦ってきました。**創価学会は、「日蓮大聖人が如く」そして「牧口先生が如く」「戸田先生が如く」の精神で進み、発展してきた。師弟不二を目指す実践があったからこそ、広宣流布が進んできたのです。**(中略)

齊藤 仏宝と法宝を正しく示されたがゆえに、日興上人が僧宝となるわけですね。正しい日蓮仏法の信仰は、六老僧の中では日興上人のみが継承されました。

名誉会長 その日興上人も、仏道修行していくうえで師弟が必要であることを強調されている。「この法門は、師弟の道を正して仏になる。師弟の道を誤ってしまえば、同じく法華経を持ちまいらせていても、無間地獄に堕ちてしまうのである」と仰せです。

上記を拝した後、私は、更に須田晴夫著「日興門流と創価学会」を読みました。その冒頭には、日蓮の真意をただお一人継承された日興上人と、日蓮に違背した五老僧の対立(五一相対)について詳述されています。私はこれを読み、今回の「教学要綱」の底意である釈迦本仏論が、大聖人在世の五老僧の犯した違背と同じであると思いました。

ここでは、内容は記しませんが、私は、須田晴夫氏が日蓮大聖人在世の門下の善悪の状況を考察されたことは、日蓮仏法への「温故知新」であり、大聖人の真意、また、それをただ一人受け継がれた日興上人の、さらには、今に続く日興門流の正義、清流を証明された偉業であると思っています。

また、この本の付録にある一宮田論文への疑問—も、まさに「教学要綱」を自らが作成したと表明した宮田幸一氏の誤りを破折した、広布史に残る文献であると思います。



この論述の最後に、戸田先生のご指導が次のようにあります— 佐渡以後の本尊建立については、五老僧はわからないのです。ですから、御本尊とはどれほどのものかということは、「常随給仕」と申しまして、そばについて離れなかった御開山日興上人しかわからなかったのです。(戸田城聖全集第二巻 156 頁)—と。まさに、須田氏の論考は戸田先生のご指導を仰がれた正論です。下記は本著作の目次と「五一相対」の説明です。ご参考下さい。

目次	
第一章	日興と五老僧の対立(五一相對)
第一節	本弟子六人の事績 9
第二節	五一相對の概要と背景 14
1	「天台沙門」の呼称 16
2	国家安泰の祈禱(祈国) 20
3	神社参詣を巡る問題 21
4	御書に対する姿勢の相違 23
5	本尊観の相違 24
6	修行観の相違 31
7	曼荼羅本尊の書き方の相違 33
8	五一相對の背景 34

「富士一跡門徒存知の事」と「五人所破抄」によれば、五老僧と日興の相違点は次の諸点である(これを五老僧と日興との対比という意味で「五一相對」という)。

- ①日興が日蓮の弟子と称したのに対し、五老僧は自身について「天台沙門」と称し、伝教大師の余流とした。
- ②日興が日蓮に倣って他宗と並んでの国家安泰の祈禱を拒否したのに対し、五老僧は他宗と交わって国家安泰の祈禱を行った。
- ③日興が「神天上の法門」を遵守して神社参詣を禁じたのに対し、五老僧は神社参詣を認めた。
- ④日興が日蓮の御書を尊重して御書の収集・講義に努めたのに対し、五老僧は仮名の御書を蔑み、御書を焼却するなどして軽視した。
- ⑤日興が文字曼荼羅を本尊としたのに対し、五老僧は釈迦像を本尊とし、文字曼荼羅を軽視した。
- ⑥日興が經典の書写行や經典一部の読誦を禁じて唱題と折伏を行ったのに対し、五老僧は經典の書写や一部読誦を行った。

日蓮 1222~1282 61才 御入滅

① 日昭 (1221~1323) 40年 103才 五老僧の代表格

② 日朗 (1245~1320) 38年 76才

老 **日興** (1246~1333) 52年 88才

③ 日向 (1253~1314) 33年 62才 大聖入滅 30才 親密

④ 日眞 (1252~1317) 36年 66才 31才

⑤ 日持 (1250~?) 1295 45才で東北 北條道 中国へ

従弟同志 (地上宗仲・宗長) の叔父が ①の日昭

②日朗

③日向

④日眞は 常木常忍の養子 → 活動は下総中心

↓

その後常忍の不仲 → 袂を分かつた → その後日興に師事

⑤日持は 松野六郎左衛門の次男で生まれた 最初日興の弟子 → その後日蓮の弟子 日向と命

日興は自身が教団の長の立場にあるため日興門流の秘奥の教義である日蓮本仏義を著作の形で対外的に公にすることは抑制していたと思われるが、日興が日蓮を根源仏とする立場に立っていたことは日興による曼荼羅本尊の書き方を見れば明確である。日興は曼荼羅本尊を書く時、中央には必ず「南無妙法蓮華經 日蓮 在御判」と大書し、その左右に釈迦牟尼仏・多宝如来と記した。日蓮自身も曼荼羅本尊の図頭に際しては中央に「南無妙法蓮華經 日蓮 〈花押〉」と記し、釈迦・多宝はその左右に小さい文字で記している（佐渡に向かう前日に図頭された最初の文字曼荼羅である楊枝本尊をはじめ、釈迦・多宝が略されている真筆曼荼羅本尊も多数存在する）。中央に「南無妙法蓮華經 日蓮 在御判」と記す日興の方式は日蓮による曼荼羅図頭の方式をそのまま踏襲していることが分かる。その曼荼羅本尊の相貌は日蓮が南無妙法蓮華經と一体の根源仏であり（人法一箇）、釈迦如来・多宝如来はその脇士として従属的立場にあることを示している。それに対して五老僧の場合、自分が曼荼羅を書く際に例えば「南無妙法蓮華經 日朗 〈花押〉」などと南無妙法蓮華經の下に自分自身の名前を記した。五老僧は日蓮が南無妙法蓮華經の下に自分の名前を記した姿を見て、南無妙法蓮華經の下には曼荼羅を書いた当人の名前を書くものと理解したのである。この在り方は五老僧が日蓮を末法の本仏と理解できず、自身と同列の存在と見ていたことを示している。

左、須田晴夫著「**新版 生命変革の哲学—日蓮仏教の可能性**」173頁には — **五老僧が、日蓮大聖人を否定し、御本尊に自著、自筆した暴挙、即ち、日蓮仏法の「人法一箇」を否定したことが記されています。この五老僧と同じように、大聖人の曼荼羅について否定したのが宮田幸一氏の下記言質です。**

一日蓮の曼荼羅に書かれた禍福の讃文「有供養者福過十号」と「若悩乱者頭破七分」の予言は宗教社会学的には、真理とは言えないと思っている。（中略）その意味で私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からはその記述を除外すべきだ—と。（本拙文26頁に既述）

日蓮を誤りだとする人が書いた「**教学要綱**」を、**池田先生**が監修されたと明示したことに、私は怒りを覚えます。誰も信じません。

「**教学要綱**」が発刊されて1年半、学会員は戸惑うばかりです。しかし、今、須田晴夫氏の完璧な破邪顕正の論述によって、「**教学要綱**」に弁解の余地は全くありません。結論、不正の書「**教学要綱**」は絶版にするしかありません。

皆様が、この拙文により「**教学要綱**」が大聖人を否定することを知り、それでもなお破邪顕正されず御本尊に唱題しても、その方の願いを御本尊（大聖人様）は叶えて下さらないです。なぜなら、自身の本心を偽っての唱題では感應妙とはならないからです。「**妙法蓮華經と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思わば、全く妙法にあらず麤法なり、麤法は今經にあらず今經にあざれば、方便なり権門なり、方便権門の教ならば成仏の直道にあらず**」（一生成仏抄、新316頁）です。また、「**謗法と同座すべからず。与同罪を恐るべきこと**」（日興遺誠置文 新2197頁）のご聖訓を拝すからです。 71/75

結びに

一昨日、友人の中村誠氏から下記論述を頂きました。ご紹介します。

仏教の開祖である釈迦を迹仏とする思想ですが、法華經を読めばそうしたことは当然起こりうることです。三千塵点劫という遙か昔に、釈迦の親であり、師匠であり、主人である大通智勝仏を登場させています。

仮に人々がこの時代に生きていたら、当然、大通智勝仏＞釈迦であり、この関係は不動のはずです。何せ釈尊の師匠なのですから。しかし寿量品で五百塵点劫という更なる久遠の過去を用意することにより、この師弟関係を覆しています。当然同様のことが釈迦と大聖人の関係にも言えることです。**釈迦が仏になったのは五百塵点劫以前ですが、大聖人は無始無終の仏であり、南無妙法蓮華經と常に一体の根本仏なわけですから、当然そうなります。**

「提婆品を案ずるに提婆は釈迦如来の昔の師なり、昔の師は今の弟子なり・今の弟子はむかしの師なり、古今能所不二にして法華の深意をあらはす」（上野殿御返事 全 1556 頁、新 1890）又、別の上野殿御返事にはこうあります

「仏はいみじしといへども法華經にたいしまいらせ候へば・螢火と日月との勝劣・天と地との高下なり、仏を供養して・かかる功德あり・いわうや法華經をや」（上野殿御返事 全 1554 頁、新 1871 頁）

この法華經を、文字通り釈迦の法華經と読むのは間違いで、「いわうやすずのくだ物をや」要するに果物をお祀りしたということから、この法華經とは文字曼荼羅という意味なのは明らかです。そうでないと文脈上おかしくなる。

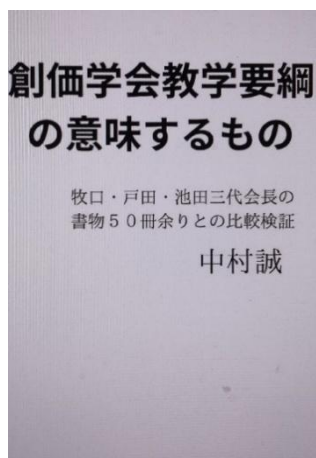
又、「涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画の二像と功德齊等なり」（木絵二像開眼之事 全 468 頁、新 662 頁）要するに仏像を法華經で開眼供養することで、その功德は生身の釈迦と等しくなるというのがこの御書の重要な点ですが、文字曼荼羅と比較すると「螢火と日月との勝劣・天と地との高下」があるということです。又、日興上人の大半の御本尊に書写された賛嘆文に曰く、有供養者福過十号（大聖人を供養する功德は、釈尊を供養する功德よりも百千万億倍勝る）。

これで宮田幸一氏が主張する釈迦の仏像＝文字曼荼羅、という主張は完全に潰れます。

又、重要なのは次の御書。「人輕しと申すは仏を人と申す法重しと申すは法華經なり夫れ法華已前の諸經並に諸論は仏の功德をほめて候・仏のごとし、此の法華經は經の功德をほめたり仏の父母のごとし」（宝輕法重事 全 1475 頁、新 1949 頁）法勝人劣を説いた重要な御書ですが、ここで問題となるのが、この御書の最後の御文「一閻浮提の内に法華經の寿量品の釈迦仏の形像を・かきつくれる堂塔いまだ候はず」です。

法よりも劣るはずの仏がなぜ祈りの対象となり、堂塔に祀られる存在となるのか。要するにこの仏とは、釈迦以外の仏であるとしか解釈不能になります。又、この法とは釈迦の法華經ではなく南無妙法蓮華經でなければ矛盾が生じます。法華經＝釈迦の御意（木絵二像開眼之事）だからです。題目＞法華經なのは、諫曉八幡抄で説かれることなので、あえて説明する必要はないでしょう。

そして、「法華經の寿量品の釈迦仏」とは報恩抄で「日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし」（全 328 頁、新 261 頁）と説かれた祈りの対象の仏であり、報恩抄と同じく浄願房に与えられた本尊問答抄で説かれる、「此の中には已に如来の全身有す」、即ち**宝塔の中におられる仏**であり、又、原殿御返事で説かれる「**日蓮聖人御出世の本懷、南無妙法蓮華經の教主・久遠実成の如来の画像**」（新 2170 頁）であることがわかります。即ち **文底の教主釈尊＝大聖人**です。一と。



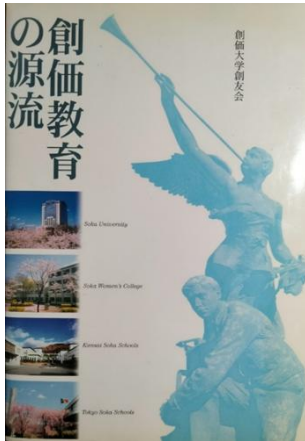
『創価学会教学要綱』と
日蓮本仏論の考察
須田晴夫

中村氏の論考は、いつもながら、素晴らしいです。拙文の主題である「御義口伝講義」の結論＝**日蓮本仏論**を示して下さいと、感謝しています

中村誠氏は、アマゾン新刊書、「『創価学会教学要綱』の意味するもの」の著者です。この本こそ「**教学要綱**」の誤りを完璧に糺した**玉稿**です！

私は、この巻末に推薦を書かせて頂きました。この書は、須田晴夫氏の著作「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」と合わせて「**教学要綱**」の**不正、誤り**を完璧に論証されました。両書により、「**教学要綱**」は**絶版とすべき**であることが明確になりました。皆様、ご一読下さい。

最後に、創価大学創立者池田先生から我々同窓生に贈られた長編詩の一部と、創価大学学生歌をご紹介します、私のこの拙文への思いとさせていただきます。



我々の魂は 燃え立っている。それは 正義を倒さんとする 荒々しく 陰湿な輩の 狂態への 怒りである

人間としての 最高の王冠を被った 気高き我らは 没落しゆく極悪の炎の 彼らの狂乱には 何も驚かない。

彼らはやがて暗闇の彼方へ 心も重く疲れ果てて 遠退いていくことを 知っているからだ。

彼らの血脈はどす黒い悪業の血脈。我らの 正義の魂の中には 常に あらゆるものを 育み照らしゆく 不滅の太陽がある。

騒々しい中傷の雑音などは 暗黒の混雑の世界へ 消え去り 滅び去っていくだろう。悪いことをしていながら 逃げ去っていくことしか 考えない卑怯者よ。我らは 満足と胸一杯に 人生の勝利者としての 襟度を持ちながら！

薔薇の花の冠をした 多くの乙女らと若人の 見つめる中を 誉れ高く進んでいくのだ。そこには一卷の英雄の物語を 残すかの如き 青春の誉れある闘争の 歴史が光る。その歴史は 永遠に朽ち果てることなく 汝の そして汝の歩む 正しき人生の詩(うた)の道を進む。

我らを迫害した者どもは 断末魔の如く喘ぎながら 虚空に去っていくだろう。
負けるな！ 我が友よ 断じて負けるな！ 我ら人間王者の名を 多くの天使らが 常に美しき 勝利と栄光の 歌曲として 歌ってくれているのだ

この人生を 我が人生を 虚しく埋没(うずもれ)て わが友からも 忘れ去られるような 終末になるな！ —

長編詩 この天地の舞台で わが人生を舞いゆけ 創価同窓の友に記念として
2002年6月 12 日 世界桂冠詩人 — (創価大学創友会「創価教育の源流」より、一部引用 211~213頁)

創価大学学生歌 作詞：沖 洋 作曲：川上 慎一



一、

紅(くれない)群れ咲く つつじの丘を 白蝶あそこに 喜び舞いて
葉桜薫れる キャンパス広く 集える若人 緑のしげり
青嵐(せいらん)はげしく 天空吹いて 凜々しくそびゆる 白亜の学舎
筆とる心に 秘めたる思い 誰(た)がために 人間の道学ぶかな

二、

桑の実みのれる 城跡(しろあと)ゆけば 栄枯(えいこ)の夢に たそがれこめぬ
父母(ちちはは)想いて はるかを見れば 点々ともれる 灯(ともしび)淡き
あおげば金星 妙なる光 燃えなんわが胸 正義の心
降りゆくとぼりは 土塁をつつむ 誰がために 平和の要塞(とりで)築きたる

三、

むらさきただよう 武蔵の空に 沈黙(しじま)を破りて 朝日(ひ)は昇りゆく
学徒の姿に 自覚(めざめ)て立てば 青山洋々 かなたに富士が
雄々しき理想 馳せたる君に 不二(ふじ)の峯 真白く 染まりて嵩(たか)し
栄えある路(みち)征(い)く 己(おのれ)に問うは

誰がために 生命(いのち)の真(まこと)求むかな

以上で、私の拙文を終わります。最後まで、お読み頂き感謝申し上げます。この拙文を親しき同志にご紹介下さい。又、皆様のご高見を拝したく存じます。忌憚なきご意見、ご指導を zusaiosamujyumoku@yahoo.co.jp まで下さいませ。 敬具 図斉 修